

米町遺跡 (No.245)

大町二丁目 2340 番 1 地点

例 言

1. 本報告は、鎌倉市大町二丁目 2340 番 1 において実施した米町遺跡（鎌倉市 No.245）の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は平成 23 年 4 月 25 日から同年 7 月 8 日にかけて、個人専用住宅の建設に伴う国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査の対象面積は、57㎡である。
3. 発掘調査体制は、以下のとおりである。
主任調査員 押木弘己（鎌倉市文化財課 臨時的任用職員）
調 査 員 渡辺美佐子、岡田慶子（鎌倉市文化財課 臨時的任用職員）
作 業 員 沼上三代治、佐藤美隆、鈴木啓之、江津兵太
（公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター）
整理作業参加者 押木弘己、岡田慶子、吉田桂子、佐藤千尋（鎌倉市文化財課 臨時的任用職員）
4. 本報告の執筆と編集は、押木が行った。
5. 本報告で使用した写真は、現地・出土遺物とも押木が撮影した。
6. 本報告では世界測地系（第 IX 系）の国家座標軸に基づく測量成果を掲げたが、平成 23 年 3 月 11 日以前に打設された鎌倉市 3・4 級基準点データを基に測量・作図したため、座標値は東日本大震災後の地殻変動に対応した補正值となっていない。
7. 本調査に係わる出土遺物および各種記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。本調査地の略称は市教育委員会の統一基準に従って「KM1101」とし、出土品への注記などに使用した。

凡 例

1. 挿図の縮尺は、遺構・遺物ともに図中に表示している。
2. 本書中に記載した国土座標値は、世界測地系（第 IX 系：東日本大震災後の補正前）に基づいている。
3. 挿図に示した方位標は座標北（Y 軸）で、真北はこれより 0° 09′ 25″ほど東に振れている。
4. 遺構挿図中の水系高は、海拔値を示す。
5. 出土遺物の年代観は以下の文献を参考としたが、筆者が各所見を理解し切れていない部分もある。
 - ◆かわらけ・遺物全体の様相：宗臺秀明 2005「中世鎌倉の土器・陶磁器」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～資料集』
 - ◆輸入陶磁器：太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡 X V—陶磁器分類編一』
 - ◆瀬戸窯製品：藤澤良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院
 - ◆常滑・渥美窯製品：愛知県 2012『愛知県史』別編窯業 3 中世・近世常滑系

目 次

第一章 遺跡の位置と歴史的環境	5
第二章 調査の方法と経過	5
第1節 調査に至る経緯	
第2節 調査の方法	
第3節 調査の経過	
第三章 基本土層	8
第四章 発見された遺構と遺物	12
第五章 調査成果のまとめ	28
付 編 米町遺跡の寄生虫卵分析・花粉分析	47

挿図目次

図1 調査地点の位置	6	図9 4面全体図	21
図2 調査区配置図	7	図10 出土遺物(1)	22
図3 調査区壁断面図	9	図11 出土遺物(2)	23
図4 1面全体図	13	図12 出土遺物(3)	24
図5 1面遺構3(井戸)	14	図13 出土遺物(4)	25
図6 2面全体図	16	図14 出土遺物(5)	26
図7 3a面全体図・炉穴個別図	18	図15 出土遺物(6)	27
図8 3b面全体図	20	図16 周辺調査地点および道路推定ライン	28

表 目 次

表1 出土遺物観察表	31	表2 出土遺物カウント表	38
------------	----	--------------	----

図版目次

図版1	51	3. I区表土掘削後(北東から)
1. 現地調査前(北東から)		4. I・II区表土掘削状況(西から)
2. 調査地から祇園山を望む(II区調査時・南から)		5. I区攪乱1(南西から)

6. I区1面(北東から)	3. I区3面遺構214b(南東から)
図版2 I区I面遺構3(井戸・4面調査時)①	4. I区3面遺構214b断面(北西から)
..... 52	5. I区3面遺構214b断面(南東から)
1. 井戸枠検出状況(南から)	図版7..... 57
2. 井戸枠土台材上かわらけ出土状況(東から)	1. I区大雨後(2011年5月30日・西から)
3. 井戸枠南壁(北東から)	2. I区3b面(北東から)
4. 井戸枠北壁(南西から)	3. I区4面(北東から)
5. 井戸枠南西隅の支柱(東から)	4. I区西壁断面(南東から)
6. 井戸枠北西隅の支柱(南から)	5. I区北壁断面(南西から)
図版3 I区I面遺構3(井戸・4面調査時)②	図版8..... 58
..... 53	1. II区攪乱1(北東から)
1. 井戸枠北西隅の土台材(南東から)	2. II区1面(北東から)
2. 井戸枠北西隅の波食台岩盤と土台材(南から)	3. II区1面 東西道路(北西から)
3. 井戸枠北西隅の波食台岩盤と土台材(南から)	4. II区2面(北東から)
4. 調査区東壁での土層断面(北西から)	5. II区2面東西道路・遺構214(北西から)
5. 井戸枠内と裏込め土土層断面(北西から)	6. II区2面遺構215(南西から)
6. 中世基盤層～波食台岩盤土層断面(北東から)	図版9..... 59
図版4..... 54	1. II区3面(北東から)
1. I区2面(北東から)	2. II区3面東西道路・遺構214b(南西から)
2. I区2面遺構47(南東から)	3. II区3b面(北東から)
3. I区3面プラン確認後(北東から)	4. II区3b面東西道路・遺構214b(南西から)
4. I区3面プラン確認後(東から)	図版10..... 60
5. I区3面上遺物出土状況(南東から)	1. II区3b面下(北東から)
図版5..... 55	2. II区4面(北東から)
1. I区3面(北東から)	3. II区4面遺構259(北東から)
2. I区3面土間状整地面(北から)	4. II区4面遺構259断面(北東から)
3. I区3面土間状整地面の断面(北東から)	5. II区4面下(北東から)
4. I区3面土間状遺構・炉址の断面(北東から)	図版11..... 61
5. I区3面炉址の断面(北東から)	1. II区4面遺構300(4面下調査時・北東から)
6. I区3面炉址南半部(北東から)	2. II区4面遺構300(4面下調査時・北東から)
7. I区3面炉址掘り方(北東から)	3. II区4面遺構300断面(北東から)
図版6..... 56	4. II区4面遺構300断面(南西から)
1. I区3面遺構214b遺物出土状況(南東から)	5. II区北壁断面(南西から)
2. I区3面遺構214b遺物出土状況(南東から)	図版12～17 出土遺物..... 62

第一章 遺跡の位置と歴史的環境

米町遺跡は、鎌倉市街地の南東部に位置し、東西 700 m、南北 200 m の広がりをもつ。本地点は遺跡範囲内で 16 例目の調査地となる（図 1 - 地点 a）。地形的には滑川の支流である逆川の右岸（北岸）に位置し、北の山稜（祇園山）裾部から逆川に向かう微高地上に立地している。現地表の標高は、7.9 m。

調査地の北には長谷・笹目から名越方面へと通じる東西道（県道鎌倉葉山線）が走る。中世から都市鎌倉の基幹道であったと考えられ、奈良時代の宝亀二年（771）以前の東海道駅路に前身を求める見方もある（藤沢市教育委員会 1997）。中世の道路名称については定説がないものの、「大町大路」とする理解が一般的かと思われる。遺跡名の「米町」は『吾妻鏡』建保元年（1213）五月二日条に「若宮大路米町口」「米町辻」などとあり、後述する町屋免許の記事などとともに、鎌倉時代に遡る地域名であることを示している。時代は下り、明応年間（1492～1501）の製作とされる「善寶寺寺地図」には「置石」（段葛）の東に滑川に架かる橋（延命寺橋）と町屋らしき家並みが続き、そこに「米町」の注記がみえる。政権都市としての役割を終えた戦国時代においても、「米町」が一定の賑わいをもつ地区であったことを示す貴重な史料である。

鎌倉時代、建長三年（1251）と文永二年（1265）の二回、鎌倉の商業地区を規定する通達が出されたことは有名であるが、そこには「米町」や異称の「穀町」として当地区も挙げられている。詳細な範囲は定かでないが、鎌倉中期には米町が幕府の公認を受けるだけの商業地に成長していたことを物語っている。

図 1 - 地点 b では庶民の家屋と考えられる簡素な板壁建物の建ち並ぶさまが見て取れ、傘轆轤や製作途上の草履芯など手工業者の存在を窺わせる遺物が出土している。これらは主に鎌倉中・後期に属しており、史料が示す町屋的活動を裏付ける成果となった。一方で、当地区には御家人の邸宅が存在していたことを史料は伝えており、一概に庶民（≡商工業者）の居住・活動の場という要素だけで当地を語ることはできない。地点 d では溝と柱穴列（塀）によって区画された空間に多数の井戸が穿たれており、区画の面積や井戸の規模が大きい点、そして常滑突帯付三耳壺などの優品も含む出土遺物から、寺院地または屋敷地としての性格が考えられている。この点も史料が示すとおりで、当地区の中世景観は屋敷・寺院地と庶民の居住地とが混在して形づくられていたのであろう。

なお、本編の第 1 章および第 5 章には、前稿（押木 2011）を再構成した文章を掲載した。記載内容には前稿からの変更点もあるが、本報告の内容を以って正式な見解に改めたい（参考文献は第五章末に掲載）。

第二章 調査の方法と経過

第 1 節 調査に至る経緯

今回の調査は個人専用住宅の建設に伴う埋蔵文化財の記録保存調査として鎌倉市教育委員会（以下、市教委）が実施した。

建築計画では最大深度 3.85 m の地盤改良工事（柱状改良）を基礎工事として行うことから、市教委では平成 22 年 11 月 24・25 日の二日間にわたって埋蔵文化財の確認調査を実施した。この結果、地表下 50cm で中世の遺物包含層を確認し、地表下 56～116cm の間に中世を中心とする 4 枚の遺構面が検出されたことから、工事の実施に先立っては本格的な発掘調査を実施する必要があると判断した。

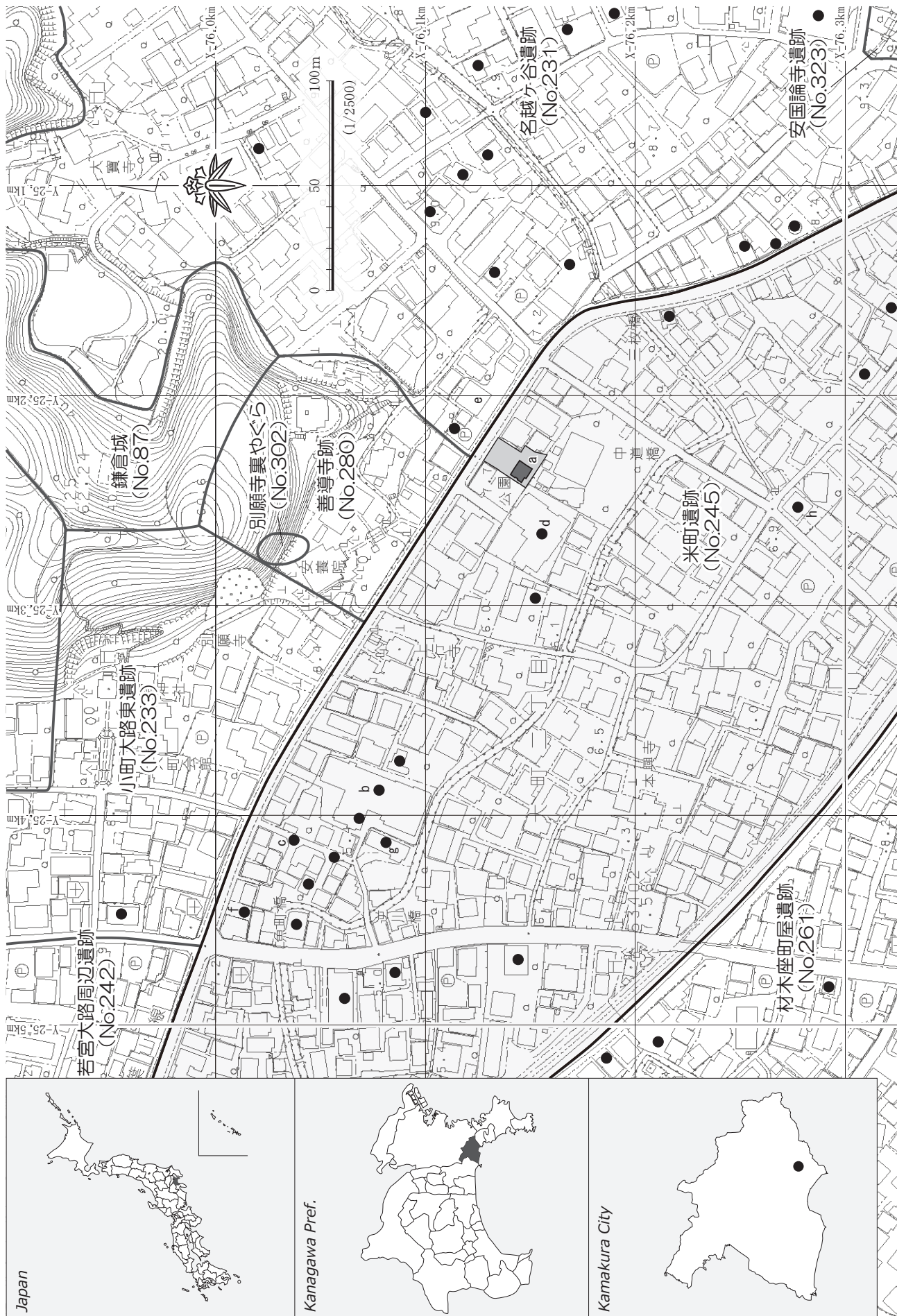
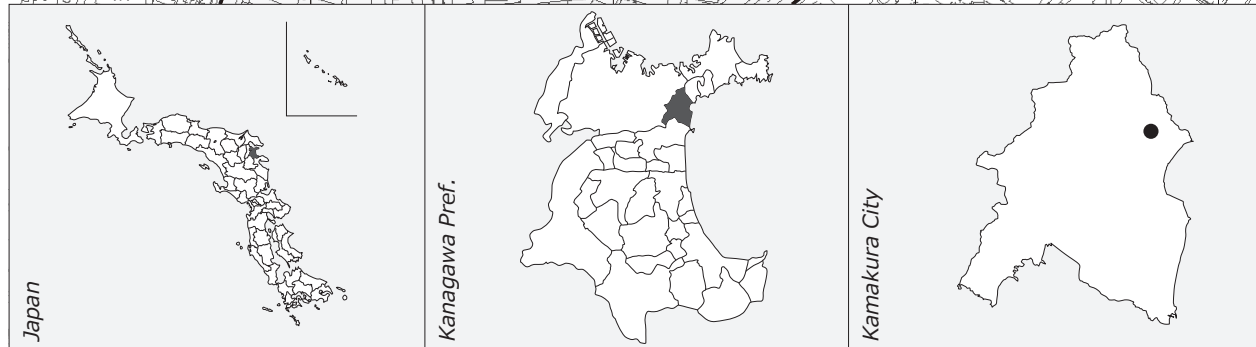


図1 調査地点の位置



現地調査は平成23年4月25日～7月8日の約二ヶ月間をかけて実施した。調査範囲は当初73.11㎡を予定していたが、隣地境の崩落防止など安全面への配慮から、最終的な面積は55.99㎡に縮小した。



図2 調査区配置図

第2節 調査の方法

掘削に伴う残土置き場を確保する必要から、調査区は東側のⅠ区と西側のⅡ区とに分け、Ⅰ区→Ⅱ区の順に調査を進めた。確認調査の結果を受け、地表下50cmまでは重機で掘削し、以下は人力での掘削に移行した。なお、現地では検出した遺構面を問わず遺構番号1～100までをⅠ区に、200以降をⅡ区に振り分けた。本報告では番号の改称は行わず、現地調査時のものを使用する。

今回の調査では、中世に帰属する5枚の遺構面を確認し、順次、写真撮影と測量図の作成を行った。測量に当たっては国家座標値を載せた基準杭を敷地内に設定し、光波測距儀で測定した座標値を方眼紙にプロットする方法で平面図を作成した。国家座標の移設は市道上の鎌倉市3級基準点「53402」と、同4級基準点「UO033」の二点間関係をもとに開放トラバース法によって行った。両基準点の座標値は旧測地系に準じていたため国土地理院が公開するWeb版「TKY2JGD」を用いて世界測地系座標値に変換した後に測量・移設に当たった。標高は3級基準点「53402」(7.580 m)を起点として、直接水準測量を行って調査敷地内の測量杭に移設した。この時点では同年3月11日に発生した東日本大震災に伴う地殻変動に対応した補正測量が進んでいなかったため、本報告では未補正の座標値を提示している。

第3節 調査の経過

前述のとおり、調査はⅠ区からⅡ区の順に進めた。重機での表土掘削はⅠ・Ⅱ区を合わせて平成23年4月25日に実施し、翌26日に調査用具を搬入して本格的に調査に着手した。両区とも遺構の確認と掘削、図面の作成および写真撮影など記録作業を進めた。Ⅰ区は6月9日に、Ⅱ区は7月6日に調査を終了した。7月8日には調査用具を撤収して、現地での全調査工程を完了した。

出土品および記録類の基礎整理は平成25年度に行い、報告書作成に関わる作業は平成27年度の後半から28年度前半にかけて、鎌倉市教育委員会文化財課分室において断続的に行った。

第三章 基本土層

本調査地点は鎌倉市街地の南西部に位置し、北は丘陵尾根(祇園山)に、南は逆川で画された微高地に立地している。この逆川北岸(右岸)一帯の丘陵裾部は縄文海進期に侵食・形成された波食台岩盤を基盤とし、その上に厚さ60～80cmほどの砂層が堆積している(図3-Ⅳe～Ⅳc層)。この上位に褐色砂質土(Ⅳb層)および黒褐色粘質土(Ⅳa層)が堆積する。Ⅳa層には少量の中世遺物が混入しており、Ⅳb層を中世基盤層(中世地山)とすることができる。波食台岩盤の上面は標高5.4m付近で、Ⅳa層上面は6.45m～6.6m前後で確認され、南に向けてわずかに低くなる。Ⅳa層の上位には中世の盛土整地層および遺構埋土が堆積している(Ⅲ層)。Ⅲ層は標高7.6m前後まで1m強の厚さを持ち、この中で人為的土地改変が幾度も繰り返された結果、100層以上の細別層を確認することとなった。大きく捉えると、Ⅳ層上面(4面)も含め計5枚の遺構面の重なりを確認している。Ⅱ層は中世の遺物包含層であるが、上面が削平で失われているとすれば、中世後期の遺構面構築土であった可能性も考えられる。

Ⅰ層は近世～近代の堆積層で、Ⅱ層以下に比べ、明るい褐色を呈する砂質土である。0層は碎石層で、この上にアスファルトが貼られ駐車場として利用されていた。現地表面の標高は8.0m弱を測る(図2)。

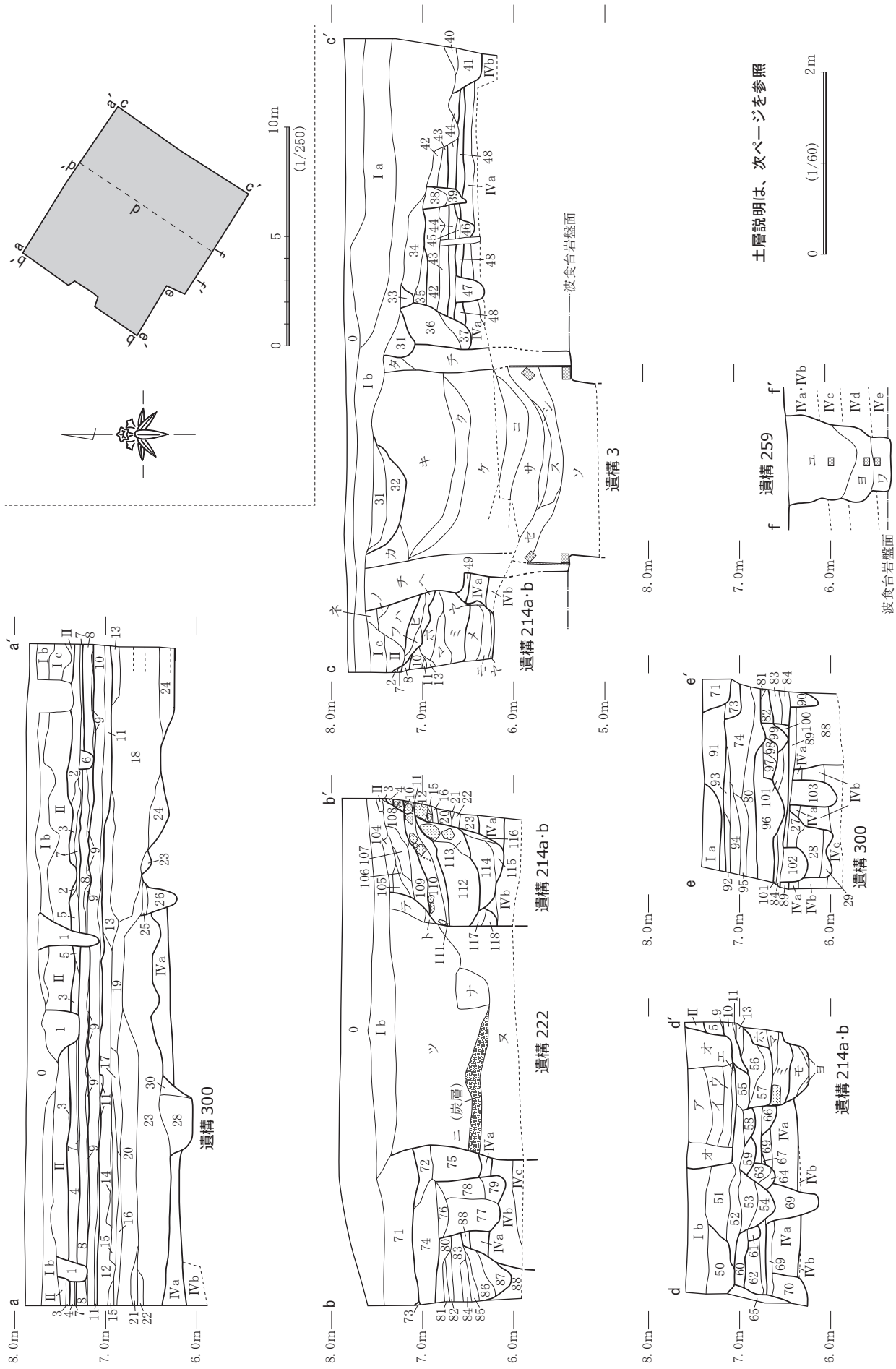


図 3 調査区壁断面図

基本土層説明

- 0 碎石
- Ia 暗褐色土 砂質土。拳大の泥岩ブロック多い。近世以降。
- Ib 暗褐色土 砂質土。近世以降。
- Ic 暗褐色土 砂質土。近世以降。
- II 褐色土 1～3mm大の泥岩粒と拳大の泥岩ブロック密。縮まりあり。中世～近世の整地層か。
- III 中世層 中世の遺構面および遺構覆土、遺物包含層の総称。100層以上に細別。
- IVa 黒褐色土 粘質土。縮まり強い。中世基盤層。
- IVb 褐色土 砂質土。縮まりややあり。
- IVc 暗黄灰色砂 やや粗粒。縮まりあり。
- IVd 暗黄灰色砂 粗砂。5～10mmの泥岩粒少量。
- IVe 黒色砂 微細砂。縮まり弱い。

中世層 (III層) 土層説明

- 1 暗褐色土 1～5cmの泥岩粒多い。
- 2 褐色土 1～5cmの泥岩粒やや密。
- 3 褐色土 砂質土。混入物殆どなし。
- 4 明黄褐色土 人頭大の泥岩ブロック並置。道路構築土。
- 5 褐色土 1～3cmの泥岩粒多い。縮まりあり。
- 6 暗褐色土 1～3cmの泥岩粒少量。
- 7 褐色土 砂質土。混入物なし。縮まりややあり。
- 8 明黄褐色土 人頭大の泥岩ブロック並置。道路構築土。
- 9 褐色土 砂質土。混入物なし。縮まりややあり。
- 10 明黄褐色土 人頭大の泥岩ブロックを並置。道路構築土。
- 11 褐色土 砂質土。混入物なし。
- 12 明黄褐色土 人頭大の泥岩ブロックを並置。道路構築土。
- 13 暗褐色土 砂質土+粘質土。泥岩ブロック少量。
- 14 灰褐色土 砂質土。混入物なし。縮まりややあり。
- 15 灰褐色土 砂質土。1～2cmの泥岩粒少量。
- 16 灰褐色土 砂質土。混入物なし。
- 17 暗灰褐色土 砂質土。1cm以下の泥岩粒少量。
- 18 褐色土 砂質土+粘質土。1～3cmの泥岩粒少量。
- 19 褐色土 砂質土。粘質土ブロック少量、泥岩ブロック微量。
- 20 黒灰色土 砂質土+粘質土。
- 21 黒褐色土 粘質土。5mm大の泥岩粒微量。
- 22 黒褐色土 粘質土。混入物なし。縮まり弱い。
- 23 暗褐色土 砂質土。1cmの泥岩粒少量。粘性ややあり、縮まり弱い。
- 24 黒褐色土 粘質土。1cmの泥岩粒、炭粒ごく微量。縮まり弱い。
- 25 黒褐色土 粘質土+ベークース。砂粒、炭粒少量。
- 26 黒褐色土 粘質土。2～3cmの泥岩粒少量。
- 27 黒褐色土 粘質土。1mm以下の白色・褐色粒子少量。粘性強く、縮まりあり。
- 28 黒褐色土 粘質土。1mm以下の白色・褐色粒子ごく微量。粘性強く、縮まりあり。
- 29 灰褐色土 微細な砂質土。粘性ややあり。
- 30 黒褐色土 粘質土。砂質土少量。

- 31 暗褐色土 砂質土。1cm以下の泥岩粒少量。
- 32 暗褐色土 砂質土。3cm大の泥岩粒少量。
- 33 暗褐色土 1～3cmの泥岩粒少量。
- 34 暗褐色土 1～3cmの泥岩粒、炭粒少量。縮まりあり。
- 35 暗褐色土 1cm大の泥岩粒少量。
- 36 暗褐色土 1～3cmの泥岩粒少量。
- 37 暗褐色土 1～3cmの泥岩粒微量。
- 38 暗褐色土 1～3cmの泥岩粒多い。縮まり弱い。
- 39 暗褐色土 1cmの泥岩粒微量。縮まり弱い。
- 40 暗褐色土 1cmの泥岩粒微量。縮まり弱い。
- 41 暗褐色土 1cmの泥岩粒少量。縮まり弱い。
- 42 暗褐色土 3～5cmの泥岩粒多い。縮まりあり。
- 43 褐色土 砂質土。1cmの泥岩粒少量。
- 44 黒褐色土 粘質土。1cm以下の泥岩粒少量。土間状遺構と同レベル。
- 45 黒褐色土 粘質土。砂粒、炭粒少量。縮まりややあり。
- 46 黒褐色土 粘質土+砂。1cm大の泥岩粒少量。
- 47 暗褐色土 粘質土+砂。縮まりややあり。
- 48 黒褐色土 粘質土。砂粒、炭粒少量。縮まりあり。
- 49 黒褐色土 粘質土。砂粒、炭粒微量。IVa層より縮まり弱い。
- 50 暗褐色土 砂質土。2～3cmの泥岩粒少量。
- 51 暗褐色土 砂質土。1cm大の泥岩粒少量。縮まりややあり。
- 52 暗褐色土 3～5cmの泥岩粒多い。
- 53 暗褐色土 1cm大の泥岩粒やや多い。縮まり弱い。
- 54 暗褐色土 1cm大の泥岩粒少量。縮まり弱い。
- 55 褐色土 砂質土。3cm大の泥岩粒ごく微量。2面道路側溝が。
- 56 褐色土 砂質土。混入物殆どなし。縮まりやや強い。
- 57 褐色土 砂質土。2cm大の泥岩粒ごく微量。56層より縮まり弱い。
- 58 褐色土 砂質土。混入物殆どなし。
- 59 暗褐色土 2cm大の泥岩粒少量。
- 60 褐色土 3～5cmの泥岩粒が主体。縮まり強い。
- 61 暗褐色土 2～3cmの泥岩粒やや多い。縮まりあり。
- 62 暗褐色土 2cm大の泥岩粒少量。縮まりややあり。
- 63 褐色土 砂質土。1cm大の泥岩粒ごく微量。
- 64 褐色土 砂質土。1cm大の泥岩粒微量。63層より色調やや暗い。
- 65 暗褐色土 砂質土。2cm大の泥岩粒少量。
- 66 暗褐色土 1cm大の泥岩粒微量。
- 67 黒褐色土 砂質土。炭粒微量。粘性、縮まりややあり。
- 68 暗褐色土 1～2cmの泥岩粒やや多い。縮まり、粘性ややあり。
- 69 明黄褐色土 1～4cmの泥岩粒密。3面土間状遺構の構築土。
- 70 黒褐色土 炭粒微量。IVa層より縮まりやや弱い。
- 71 黒褐色土 砂質土。拳大の泥岩ブロック少量。縮まり弱い。
- 72 暗褐色土 1～2cmの泥岩粒少量。
- 73 暗褐色土 1cm以下の泥岩粒少量。縮まりややあり。

攪乱・主要遺構 土層説明

- 0面 攪乱1
 ア 暗褐色土 砂質土。1cm大の泥岩粒少量。縮まり弱い。
 イ 暗褐色土 砂質土。炭粒多い。
 ウ 黒色土 炭粒が主体。
 エ 暗褐色土 砂質土。2cm大の泥岩粒やや多い。縮まり強い。
 オ 砂質土 1～5cmの泥岩粒少量。

1面 遺構3 (井戸)

カ～チ 図5-1～12層。

1面 遺構222 (井戸?)

- ツ 暗褐色土 拳～人頭大の泥岩ブロック多い。
 テ 暗灰褐色土 砂質土。1cm大の泥岩粒少量。
 ト 暗灰褐色土 砂質土。1mm以下の泥岩粒微量。
 ナ 暗黄褐色土 拳大の泥岩ブロック多い。縮まりあり。
 ニ 黒褐色土 炭粒主体。縮まり弱い。
 ス 暗褐色土 拳～人頭大の泥岩ブロック非常に多い。

1面 遺構214a (道路側溝)

- 「ネ 暗褐色土 3cm大の泥岩粒多い。縮まりあり。
 214a① 「ノ 暗褐色土 1～2cmの泥岩粒少量。
 「ハ 暗褐色土 1cm～拳大の泥岩粒やや多い。縮まりあり。
 「ヒ 褐色土 砂質土。1～3cmの泥岩粒少量。
 214a② 「フ 明黄褐色土 1～3cmの泥岩粒が密に入る。縮まりあり。
 「ヘ 褐色土 砂質土。3cm大の泥岩粒少量。

2面・3面 遺構214b (道路側溝)

- 「ホ 明黄褐色土 3cm～拳大の泥岩ブロックが密に入る。縮まりあり。
 214b① 「マ 褐色土 砂質土。
 「ミ 褐色土 砂質土+粘質土1～3cmの泥岩粒少量。
 「メ 暗褐色土 砂質土。粘質土ブロック、1cm大の泥岩ブロック少量。
 214b② 「モ 黒褐色土 粘質土。1cm大の泥岩粒、炭粒ごく微量。縮まり弱い。
 「ヤ 黒褐色土 微細な砂質土。縮まり弱い。

3b面 遺構259 (土坑)

- ユ 黒灰色土 粘質土。1cm大の泥岩粒、炭粒微量。
 ヨ 黒色土 炭粒主体。縮まり弱い。
 ヲ 黒色土 粘質土+砂。炭粒非常に多い。縮まり弱い。

- 74 黄褐色土 1cmの泥岩粒主体。縮まりあり。
 75 暗褐色土 5cm～拳大の泥岩粒やや多い。縮まりあり。
 76 暗褐色土 1cm以下の泥岩粒少量。
 77 暗褐色土 拳～人頭大の泥岩ブロック多い。
 78 暗褐色土 1cm以下の泥岩粒やや多い。
 79 黒褐色土 粘質土。炭粒少量。
 80 暗褐色土 1cm以下の泥岩粒多量。縮まりやややあり。81 灰褐色土 砂質土。混入物なし。
 82 暗褐色土 拳大の泥岩粒多い。縮まりあり。
 83 黄褐色土 拳～人頭大の泥岩ブロック主体。縮まり強い。
 84 暗褐色土 砂質土。1～3cmの泥岩粒微量。縮まりやややあり。
 85 黒褐色土 粘質土。1cm以下の泥岩粒少量。
 86 黒褐色土 粘質土。縮まり弱い。
 87 灰褐色土 微細な砂質土。縮まり弱い。
 88 黒褐色土 炭粒微量。粘性強く、縮まりやややあり。
 89 明黄褐色土 1cm大の泥岩粒密。3面土間状遺構の構築土。=69層と同一層か。
 90 暗褐色土 砂質土。5mm大の泥岩粒ごく微量。粘性やややあり。
 91 暗褐色土 1cm以下の泥岩粒少量。縮まり弱い。
 92 明黄褐色土 拳大の泥岩ブロック主体。縮まり強い。
 93 暗褐色土 1cm以下の泥岩ブロック主体。縮まりあり。
 94 明黄褐色土 泥岩の粒・ブロックによる整地層。縮まり強い。
 95 暗褐色土 1cm～拳大の泥岩少量。縮まりやややあり。
 96 明黄褐色土 拳～人頭大の泥岩ブロック主体。縮まり強い。
 97 灰褐色土 砂質土。混入物なし。縮まりやややあり。
 98 暗褐色土 拳大の泥岩ブロック少量。縮まりやややあり。
 99 暗褐色土 3cm大の泥岩ブロックやや多い。縮まりやややあり。
 100 暗褐色土 縮まりやややあり。
 101 明黄褐色土 5cm大の泥岩ブロック主体。縮まり強い。
 102 黒褐色土 5mm大の泥岩粒少量。粘性、縮まりあり。
 103 灰黒色土 黒色粘質土をベースに灰色砂が斑紋状に混入。粘性あり、縮まりやややあり。
 104 暗灰褐色土 砂質土。1～5cmの泥岩粒少量。
 105 明黄褐色土 1～2cmの泥岩粒主体。縮まりあり。
 106 黄灰色砂 1cm大の泥岩粒多量。
 107 明黄褐色土 1～5cmの泥岩粒主体。縮まり強い。
 108 暗褐色土 1cm大の泥岩粒少量。
 109 明黄褐色土 1～5cmの泥岩粒主体。縮まり強い。
 214a② 「110 黄灰色砂 1cm以下の泥岩粒ごく微量。
 「111 灰色砂 混入物なし。
 214b① 「112 灰黒色土 粘質土+砂。1～2cm大の泥岩粒少量。
 「113 灰黒色土 粘質土主体+砂粒少量。拳大の泥岩ブロック少量。
 「114 黒褐色土 粘質土主体+砂少量。5cm～拳大の泥岩ブロック微量。遺構214b②-メ層相当。
 214b② 「115 黒褐色土 粘質土。混入物なし。縮まり弱い。遺構214b②-モ層相当。
 「116 黒褐色土 粘質土。混入物なし。縮まり非常に弱い。遺構214b②-ヤ層相当。
 117 黒褐色土 粘質土。炭粒少量。
 118 黒褐色土 粘質土。炭粒やや多い。縮まり弱い。

第四章 発見された遺構と遺物

前章で述べたように、本地点では中世基盤層（IV a層）に達するまでに計5枚の遺構面を確認した。

最下層の4面はIV a層上面で、帰属する遺構は南北溝や円筒状の土坑などごくわずかであった。これらの遺構覆土中からは僅少ながら中世の遺物が出土しており、またIV a層の掘り下げを行った際にも中世の遺物が出土していることから、今回の調査で発見された遺構面は、概して中世の範囲で推移したことを確認できた。以下、新しい面（上層）から順に、検出遺構と出土遺物について説明する。遺構番号の振り方については、第二章第2節で述べたとおりである。

1面（図4）

7.1～7.4 m前後で確認した。表土除去後、1面検出時までの人力掘削は「0面下～1面掘り下げ」として遺物の取り上げを行った。南側がわずかに低い。層準としてはI層直下での確認で、調査区全体で安定した整地面を確認できた訳ではない。その中でも、調査区の北辺付近と西側のII区で泥岩の濃密な範囲を確認している。北辺部分では大型の泥岩ブロックを多用し、下層面でも確認されている東西道路の最新段階と考えている。明確な平面プランとしては捉えられなかったが、断面の観察では深さ50cmほどの南側溝を伴っていたことが推測できる。この埋土最上層（図3-104層）は、I層に近似する。

1面では土坑や井戸の他、近代の板敷き施設や近世の落ち込み（攪乱1・2）も検出された。

攪乱1 調査区の北東部、I区とII区に跨って検出された。長軸2.1 m、短軸1.2 mの長方形プランを呈し、確認面から20cm下で板敷き床面を検出した。長軸はN60° Wを指す。板敷き面は標高7.08 mで、掘り方の底面に幅20～40cmの板材を長軸に沿って敷き並べていた。板材は腐朽が進んで厚さ5mm以下となり、取り上げ時には原形を保つことが叶わなかった。同様に四辺の側壁には腐朽が進んだ板材の痕が見られた。床板と側板は鉄釘で固定され、埋土中も含めて24点が出土している。この他、肥前系と瀬戸・美濃系の磁器染付碗が比較的まとまって出土し、かわらけなどの中世遺物も混在していた（表2）。図10-15は瀬戸・美濃系陶器の皿。内面全面～口縁部外面にかけて灰釉が掛かる。

用途については不明だが、浅い半地下式の形状からは貯蔵・保管施設などが考えられる。

攪乱2 調査区の南壁沿いで検出された。南に向けたなだらかな落ち込みで、南側と東西が調査区外に続くため、具体的な平面形態と規模は不明である。1面上からの深さは50～70cmを測る。埋土からは肥前系および瀬戸・美濃系、堺・明石系といった近世陶磁器が出土し、相当量の中世遺物も混在している（表2・図10-16～31）。

この他、掲載順が交錯しているが、表土掘削時および表面採集遺物を図10-1～8に、0面下～1面掘り下げ時に出土した遺物を図11に示した。57～63の鉄釘には木片が固着している。攪乱1の木組みに伴っていた可能性が高い。65の漆器や66～71の木製品は遺存状態が良いことから1面に帰属するとは考えにくく、試掘坑内やサブトレンチなど下層の堆積土に接触した際に掘り上げてしまったものと思われる。

遺構3（井戸） I区の東壁際で検出された。東は調査区外に続くものの、2.8 m四方の方形掘り方で、2.2 mの方形木枠を持つ大型井戸に復元できる。I層直下まで立ち上がり、本来はさらに上位の生活面から掘り込まれたものが、近世以降に削平を受けた可能性がある。調査区の壁際でもあるため、安全面を考慮して1面調査時に埋土を一気に掘り下げることせず、4面の調査まで順次、各遺構面より低い状態を保ちながら掘り進めていく方法を採用した。その結果、確認面より2.6 m掘り下げた標高5.05 mでも底面に到達せず、ここで掘削を断念した。標高5.4 mの波食台岩盤以下は1.9 m四方の素掘りで、

岩盤面上の縁辺に幅 12cm、厚さ 8cm の厚板を据えて土台材としていた。土台材の先端部は西辺の材が凸状に、南辺と北辺の材が凹状に切り欠かれ、それらを差し込んで組み合わせていた。土台材の四隅に 6～8cm 角の支柱を立て、その上に横棧を載せて背後の側材を抑える「隅柱横棧」構造であったと見られる。側材は厚さ 2cm、幅 25～30cm の縦板が西側壁で 8 枚、土台材の背後（掘り方側）に接して立て並べられていた。隅柱、側材ともに岩盤上から 60～70cm の高さまで遺存していた。図 3 の断面図には人為的に枳材を撤去した形跡が見て取れないので、地下水位より上に存した部分は自然腐朽したものと考えられる。西辺の土台材上では小型ロクロかわらけの準完形品が伏せた状態で出土している（図 12-76・図版 2-2）。土台材を載せる波食台岩盤の上面には海棲動物の巣穴痕があり（図版 3-2）、岩盤部分の掘り方壁面には斜め方向の掘削工具痕が認められた（図版 2-4）。木枳内の埋土は概ねレンズ状堆積を示しており（図 5）、上位には炭化物の集積層が認められた（3 層）。木枳外には拳大の泥岩ブロックが裏込め材として多用されていた（12 層）。

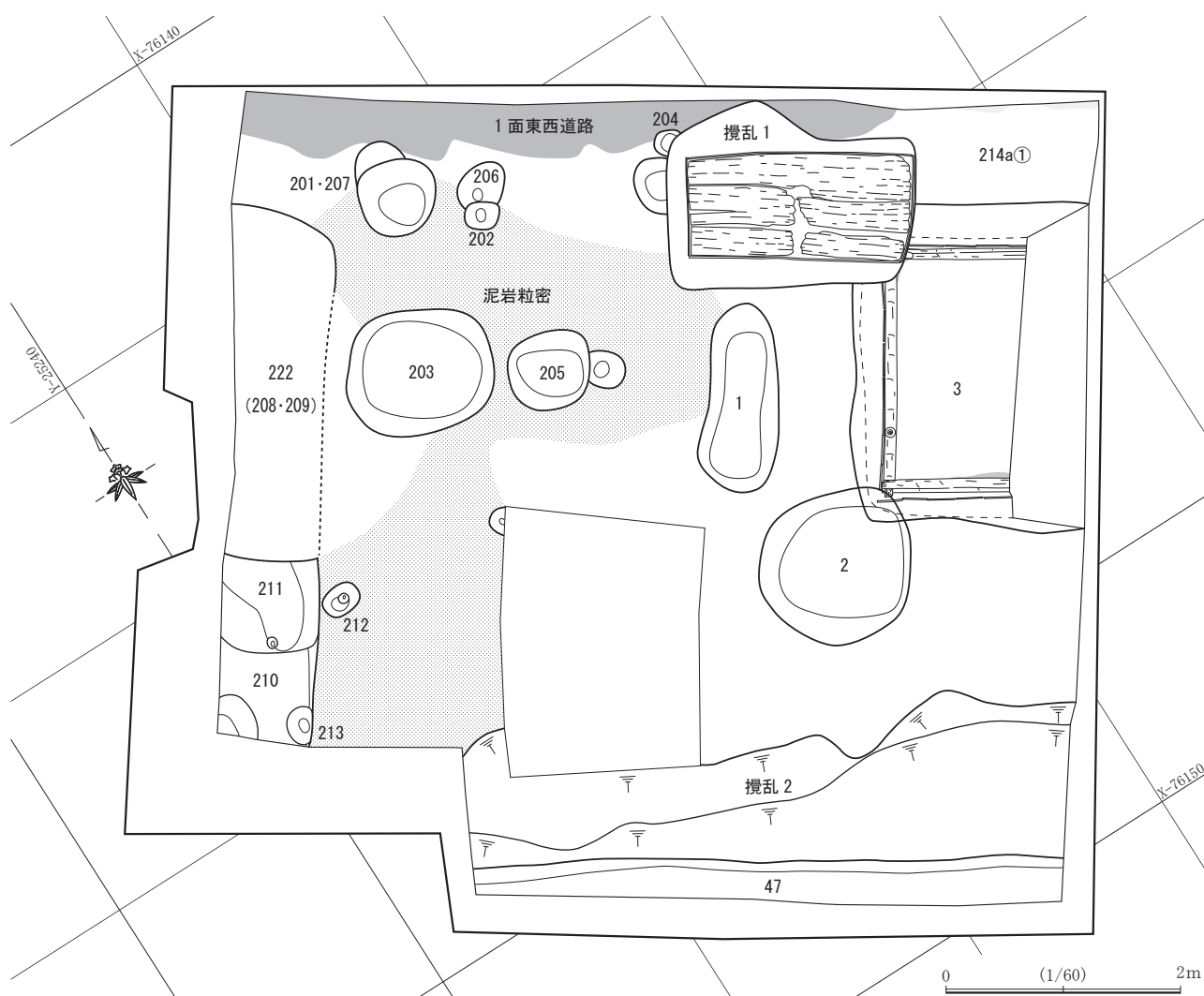
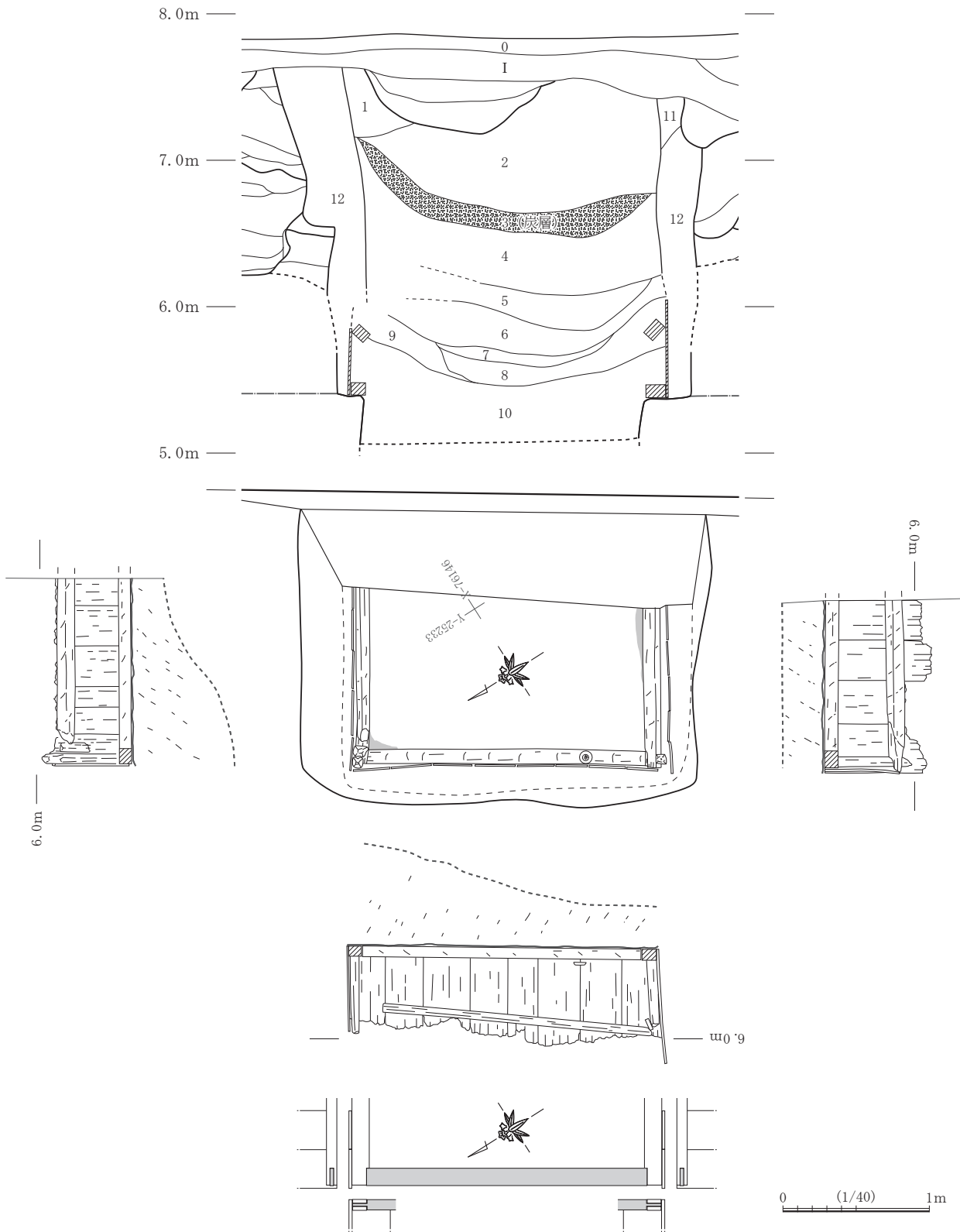


図 4 1 面全体図

1 面遺構の底面標高

遺構 No.	底面標高 (m)	遺構 No.	底面標高 (m)	遺構 No.	底面標高 (m)
1	7.09	204	7.20	210	7.13
2	7.08	205	7.04	211	6.85
202	6.79	206	6.92	212	6.93
203	6.65	201・207	6.92	213	7.00



- | | |
|------------------------------|------------------------------|
| 1 暗褐色土 拳大の泥岩ブロック少量。 | 7 暗褐色土 粘質土+砂。貝殻片少量。縮まり弱い。 |
| 2 暗褐色土 人頭大の泥岩ブロック多い。 | 8 暗褐色土 粘質土主体。貝殻片、炭粒微量。縮まり弱い。 |
| 3 黒色土 炭粒が主体。縮まり弱い。 | 9 暗褐色土 1～3cmの泥岩粒少量。縮まりややあり。 |
| 4 暗褐色土 拳大の泥岩ブロック多い。 | 10 灰褐色土 拳～人頭大の泥岩ブロック多い。 |
| 5 灰褐色土 粒径1cmの泥岩粒多い。貝殻片少量。 | 11 暗褐色土 5cm大の泥岩粒少量。 |
| 6 灰褐色土 砂質土。1cm大の泥岩粒少量。貝殻片多い。 | 12 明黄褐色土 拳大の泥岩ブロックが主体。 |

図5 1面 遺構3 (井戸)

本遺構は方形横棧支柱という中世鎌倉に通有の木枠構造を持つが、概ね一辺1 m前後となるのが通例であるなか、その2倍近い規模を有する点で特筆できる。

埋土中から出土した遺物は、表2に見るようにロクロかわらけが圧倒的に多く、手づくねかわらけは数点の出土に留まっている。後者が消滅した以降に井戸が廃絶に至ったことを示している。肥前系や瀬戸・美濃系の近世陶磁器がわずかながら見られるが、埋土上層への混入によるものと理解している。図12-72～88に本遺構出土の遺物を示した。図示可能な遺物も大部分がロクロかわらけで、陶磁器類には器形復元できる資料は皆無であった。72は手づくねかわらけの小皿。73～79はロクロかわらけの小皿。広底で低平な76や78、底径が小さく深身となる73・77など2タイプがある。81～85はロクロかわらけの大皿。深身で体部～口縁部が内湾気味となる資料が主体となり、口径14cm以上と12cm台の2法量がある。87は白磁壺の底部片。88は常滑6a型式の甕口縁部。78・80・84・85・87・88は埋土の上位に見られた炭層（図4-3層）から出土。72と79は掘り方側壁の黒色粘質土より出土し、IV a層に帰属する可能性が高い。

遺構 222（井戸） II区西壁際で検出された。東側には泥岩粒の濃密な範囲が広がり、これを切って構築されていた。遺構プラン検出時には西壁際に4基の浅い土坑が切り合っているものと捉えていたが（土坑208～211）、このうち北側の遺構208・209としたものは断面観察の結果、ともに本井戸の埋土に包括されることが判明した。表2では遺構208・209出土の遺物を個別に示しているが、ともに遺構222に帰属することを留意されたい。井戸と判断したものの、調査できた深さまでには木枠は検出されず、掘り方のみの確認となった。平面規模は南北に307cmを測り、大よそ一辺が3.0～3.1mの方形プランであったと推測される。掘り方の東辺ラインは、大よそN30°Wを指す。側壁はほぼ垂直に立ち上がり、オーバーハングする箇所も見られた。I b層直下まで立ち上がるが、本来はさらに上位にあった生活面から掘り込まれた可能性が高い。調査区の壁際にあることから安全面を考慮し、周囲の面下げに伴って段階的に埋土の掘り下げを進めた。最終的には、確認面から1.5mの深さまで掘り下げたところで掘削を断念した。

埋土には大型の泥岩ブロックや炭化物が入り、やや乱雑に埋め戻されたような印象を受ける。

本遺構の出土遺物も、ロクロかわらけが主体となる。数量比としては遺構3より手づくねかわらけの比率が高い。図12-90～92として示した。92は常滑6a型式の片口鉢Ⅱ類。体下部～底部の内面が摩耗している。

遺構 47（東西溝） 調査区南壁に沿って検出された。現地では3面の調査時に確認したものの、断面観察の結果、遺構自体はI b層の落ち込み（攪乱2）直下まで立ち上がることを確認している。2面を掘り込み面としていた可能性もあるが、後述する出土遺物の傾向を以って1面に帰属させた。北辺の肩が検出されたのみで、南への立ち上がりは確認していない。よって、溝ではなく南に開けた段切り平場となる可能性もある。検出できた限りでは、南北（幅）40cm、東西（長さ）5m以上で、深さは40cmを測る。底面標高は6.35mで、どちらか一方への傾斜は認められなかった。北肩ラインはN60°Wを指す。

本遺構からの出土遺物は僅少で、瀬戸・美濃系陶器の擂鉢片などが出土している。図示すべきものはなかった。

1面土坑 1面上では浅い皿状の断面形を呈する土坑が散在していた。いずれも用途は特定できない。各遺構の検出位置や規模は図4を、出土遺物については図12-89・93～105を参照されたい。

1面下出土遺物 図13-106～112は、I区1面下～2面掘り下げの際に出土した遺物である。表2

①からは、出土かわらけの大部分がロクロ成形品であることが分かる。ごく少量ではあるが、舶載品には白磁口禿皿や龍泉窯系青磁の蓮弁文碗が、国産陶磁器には常滑の片口鉢Ⅱ類が含まれている。

2面(図6)

標高7.0～7.2mで検出された。南側がわずかに低くなる。調査区の北壁際で南側溝を伴う東西道路が、側溝以南では方形基調の浅い落ち込みの他、土坑・小穴といった遺構が確認された。

2面東西道路 調査区の北壁に沿う形で検出された。人頭大ほどの、やや扁平な泥岩片を敷き並べて路面を構築している(図3-10層)。道路上面の標高は7.2m前後だが、縁辺のみの検出であり、北側の道路中心部に向けて高くなることが予測される。上面には、褐色砂質土の薄層が認められた(9層)。

遺構214a②(道路側溝) 東西道路の南側溝である。2面調査時には遺構214と呼称し、下位の3面道路に伴う側溝は遺構214bと呼称したが、断面観察の結果、1面でも道路側溝と認識できる浅い落ち込みが認められたことから、本報告では次のように遺構番号を整理した。1面側溝…**遺構214a①**。2面側溝…**遺構214a②**。3面側溝(新)…**遺構214b①**。3面側溝(古)…**遺構214b②**。

2面遺構214a②は、上幅50cm、下底幅40cmを測る。道路面から30～40cmの深さを持ち、底面標高は6.8～6.9mを測り、西に向けて下がる。南肩の標高は、7.0m前後を測る。箱形ないし逆台形の断面形を

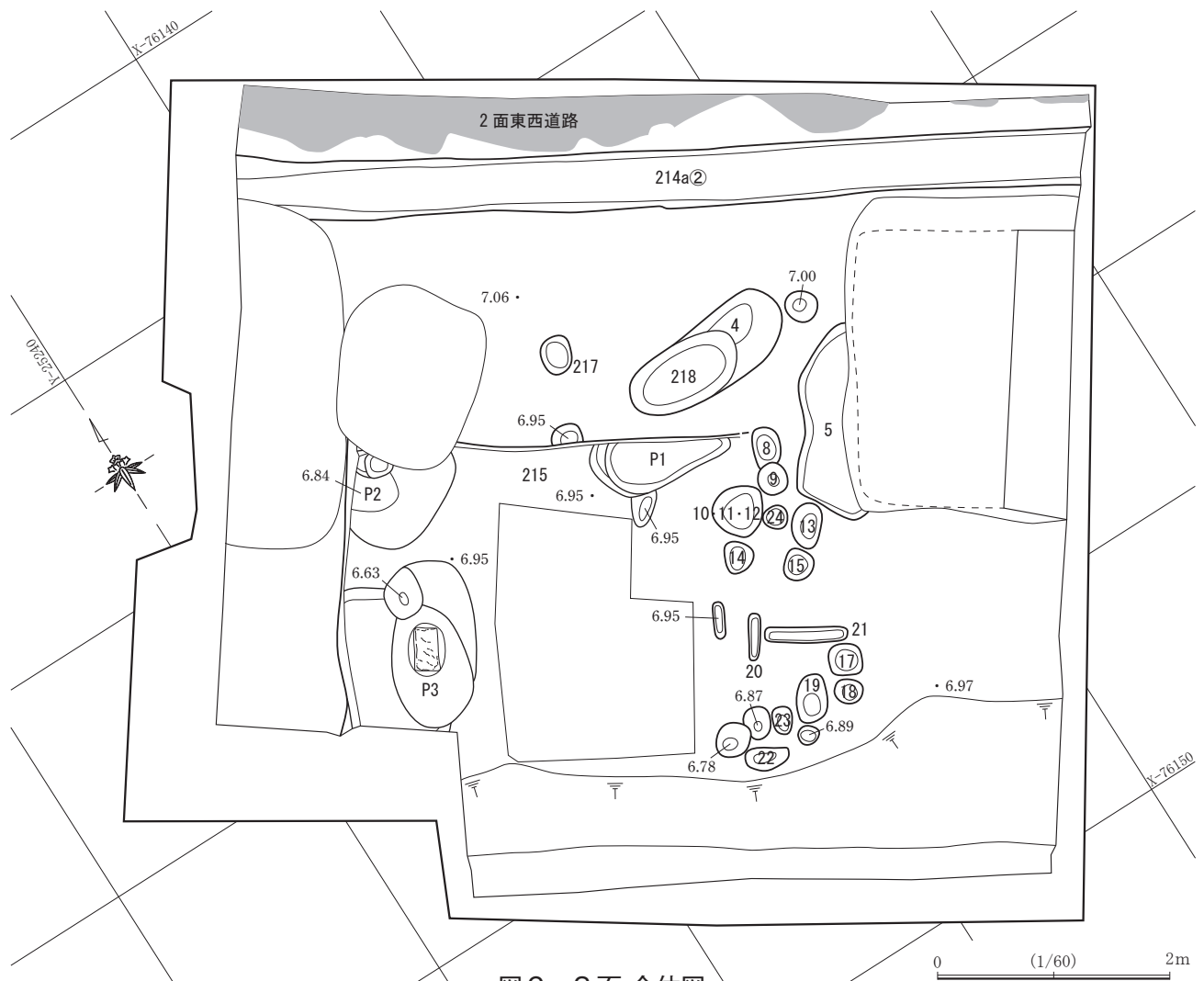


図6 2面全体図

3a面遺構の底面標高

遺構 No.	底面標高 (m)	遺構 No.	底面標高 (m)	遺構 No.	底面標高 (m)	遺構 No.	底面標高 (m)	遺構 No.	底面標高 (m)	遺構 No.	底面標高 (m)
4		9	6.77	14	6.80	18	6.93	21	6.90	215	6.95
5	6.90	10-11-12	6.78	15	6.83	19	6.84	22	6.70	215-P1	6.75
8	6.80	13	6.82	17	6.92	20	6.87	23	6.88	215-P2	6.77
										215-P3	6.72
										217	6.95
										218	7.02

呈する。埋土上層には、北から道路構築土が流入していた。走方向軸の中心軸は、N60° Wを指す。

表2③・④で示したごとく、本遺構から出土した遺物はごく少量である。その中でも主体となるのはロクロかわらけで、手づくねかわらけは1点も見られなかった。肥前系磁器の染付碗が含まれているが、本遺構より新しい遺構214a①埋土、またはさらに新しい堆積層からの混入品であろう。図示できたのは、図13-118のロクロかわらけ大皿1点である。体部の内湾度がやや弱い、器形全体としては他の2面遺構出土資料と大差ない。

遺構215（方形落ち込み） 調査区の南半部で検出された。東西3.6m、南北2.6mほどの方形範囲が確認面より5cmほど低くなっていた。落ち込みは北辺と西辺のみで確認され、攪乱2による削平を受けはっきりしないが、南へは続いていた可能性がある。落ち込みの下底部は標高6.95m前後の平坦面をなし、落ち込み際に沿って3基の小穴が検出された（図6-P1～P3）。こうした形状や掘り方の特徴から、浅い掘り込みを埋め戻して構築した壁立ち式建物（板壁建物）であった可能性が想定でき、本来外周部にあった壁板は腐食により失われてしまったと考えられる。西辺はN30° Eを指す。配置状況から、P1・2は小規模ながら柱穴であったと考え得るが、P3については判断しがたい。P3の底には長さ35cm、幅20cm、厚さ10cmほどの砂質凝灰岩切り石（鎌倉石）が据えてあった。

落ち込みの埋土および3基のピットからは、ロクロかわらけや常滑、渥美窯産の甕片が出土している。手づくねかわらけは、小皿が1点のみ出土している（表2）。図13-113はP1、114・115はP3、116はP2、117は落ち込み埋土から出土した。116は常滑6a型式の甕口縁部片。

2面土坑・ピット 上記の遺構の他、浅い土坑や小規模なピットが検出している。ピットのうち遺構215の東側に密集する一群は、同遺構に付随した痕跡であろうか。上幅が15cmほどの浅い溝状痕跡も、遺構215と平行・直交する平面軸を取ることから、根太痕など同遺構に伴うものであろう。

各遺構の出土遺物は、図13-119～123に示した。

2面下出土遺物 図13-124～140は、2面下から3面まで掘り下げた際に出土した遺物である。本図および表2①を見ても分かるように、かわらけはロクロ成形品が主体となるも、手づくね成形品が数点では留まらないところが2面までと異なる。ロクロかわらけだけを見ても、大・小とも器高が浅く低平な器形となる傾向が見て取れる。

3a面（図7）

標高6.7～7.1mで検出された。南側が低い。2面と同様、調査区の北辺に沿って東西道路が走り、その南側溝を挟んで南側にピットなどが展開していた。調査区の中央部には泥岩粒を多用した整地面が広がり、これに覆われるピットも非常に多く見つかっている。整地面上および同一レベルで確認できた遺構を3a面に、整地層下で確認した遺構は3b面に分けて提示した。

3面東西道路 調査区の北壁に沿って検出された。やや扁平な泥岩ブロックを敷き並べて路面を構築し（図3-12層）、上面には褐色砂質土の薄層が見られた（11層）。路面上の標高は7.1m前後を測り、北側調査区外の道路中央に向けて高まっていくものと見られる。本道路遺構には、新旧2時期の南側溝が伴う（新：遺構214b①、旧：遺構214b②）。

遺構214b①（道路側溝） 3面東西道路に伴う新段階の南側溝である。上幅は70～120cm、底面幅は50～60cmを測る。路面から55～75cmの深さを持ち、断面は逆台形を呈する。底面標高は6.35～6.55mを測り、西側が低い。南肩の標高は6.8m前後を測る。走方向は、N60° Wを指す。I区西端部付近の底面上ではかわらけが集積した状態で出土している。

遺構214b②（道路側溝） 3面東西道路に伴う古段階の南側溝である。上部を改修溝（遺構214b①）

に切られるが、上幅は 105cm 以上あったことが分かり、底面幅は 30～50cm を計測した。道路面からは 1 m の深さがあり、底面標高は 6.1～6.2 m を測り西側が低い。南肩の標高は、改修に伴い削平されたため 6.4～6.5 m と低い。護岸材は遺存していなかったが、木材の腐食痕から内法幅 50cm の横板組み護岸が施されていたものと思われる。走方向は、214b ①と変わらず N60° W を指す。

出土遺物については新旧の溝で分けて取り上げていないので、図 14-150～184 にまとめて提示した。このうち、151～159・161・163・169～171・173・174・176～178 が①の底面上でまとまって出土した資料である。全てかわらけで、図上では小皿は手づくねが多く、大皿はロクロかわらけが主体となっている。表 2 ④から重量比を算出すると、大で 86%、小では 67% をロクロかわらけが占め、手づくねを凌駕している。器形・法量の上では、ロクロと手づくねが相似的関係にあることが窺える。

図の配置が上下逆転しているが、181 は柱状高台のロクロかわらけ。高台のみ遺存。182 は龍泉窯系青磁の劃花文碗。18 は常滑 5 型式の甕口縁部片。

整地面（土間状遺構） 道路側溝の南側区域で、大きく 2ヶ所の整地面を確認した。どちらも泥岩粒を叩き締めて薄く平坦に仕上げてあり、周囲にピットや火炉の痕跡が見られたことから、板壁建物などに付随する土間状施設の痕跡と考えられる。

土間状遺構 1 は I 区の南部で検出された。北・南とも 1 面の遺構に切られている。泥岩粒と黄灰色の粘質土を数 cm の厚さで貼り、上面は標高 6.75 m 前後で平坦に仕上げている。部分的に途切れているが、大よそ東西 3.5 m、南北 3.0 m ほどの広がりを確認できた。この範囲からは浅い小穴や火炉と思われる小土坑を確認した。また、道路側溝と同じ軸線で延びつつ南に 4cm ほど落ちる段差が検出され、整地の切れ目や木材を据えていた痕跡かと思われる。これと平行または直交する方向で遺構 41～42 など列をなす小穴群が見られるので、これらが束柱など上屋建物の基礎痕跡であった可能性を考えている。火炉は板材で囲った形跡はなかったが、「囲炉裏」の枠材が撤去された後の痕跡かもしれない。平面規模は東西 65cm、南北 70cm で、南西側をピットに切られる。深さ 6～7cm の浅い窪みに炭粒を多く含む埋土が堆積し、その上には各 1cm 厚の炭層と焼土層が順に堆積していた。焼土層上面は固化しており、周囲の整地面より 5～7cm ほど低い平坦面をなしていた。

整地面の直上ないし 2～3cm ほど高いレベルでは完形のかかわらけが正位または伏せた状態で散在しており、図 7 に出土位置を表示した。遺物番号は図 14 に対応している。小皿はロクロかわらけのみ、大皿は手づくねかわらけのみで占められる。143 はロクロ成形の極小皿。144～146 はロクロ成形の小皿で、広底で体部は外方へ低く直線的に立ち上がる。147～149 は手づくね成形の大皿。器壁はやや厚手で、口縁端部は面取り状に仕上がっていない。148 は整地面の西縁から 50cm ばかり離れた位置で出土しており、後述する遺構 220 に帰属する可能性がある。図 14-185 は遺構 42 出土の内折れ手づくねかわらけ。

土間状遺構 2 は II 区の北部、道路側溝に接する位置で検出された。泥岩粒を多用した良好な整地面で、上面の標高は検出北端部で 6.95 m、南端部では 6.8 m 前後を測る。東西 2.7 m、南北 2.2 m の広がりを持つ。東辺と南辺には、道路側溝と平行・直交方向に延びる板材痕が認められた。東辺の板痕以東を遺構 215、南辺の板痕以南を遺構 220 として遺物の取り上げを区別したが、実際には整地面が途切れるだけで、遺構としての明確な落ち込みは確認できなかった。また、東辺と北辺に沿って並ぶ小穴があり、上屋建物の基礎痕跡となる可能性がある。本整地面が建物に付随していたとすると、道路側溝から間を置かずして建物が構築されていたことになる。

3b 面検出の遺構から出土した遺物は、図 15-203～223 に示した。

3b 面 (図 8)

土間状整地層下～IV層上面で検出された遺構を、3b 面に帰属させた。層序としては遺構 300(南北溝)も IV a 層を切っているが、埋土様相が他とは異質であることから、中世最下面となる 4 面に帰属させた。調査区の南壁際では、円筒状の土坑 (遺構 259) を確認している。

3b 面では主体となる遺構はピットで、幾重にも切り合った状態で検出された。上層の遺構面で見られた東西道路側溝や板材の痕跡と平行または直交する軸線で並ぶものと見られるが、大よそ直線上には並ぶものの、間隔が一定でないことから建物を復元するには至らなかった。上面の道路側溝に沿って 90～100cm 間隔で並ぶ東西柱穴列のみ、トーンを掛けて示した。

遺構 259 (土坑) 調査区の南壁際で検出し、南側 1/3 ほどが調査区外に続く。東西径は 114cm を測り、直径 120cm 前後の円形プランを呈すると見られる。確認面からの深さは 117cm で、波食台岩盤面を 5cm ほど掘り下げている。底面標高は、5.25 m を測る。黒色の粘質土を埋土とし、下層では炭粒

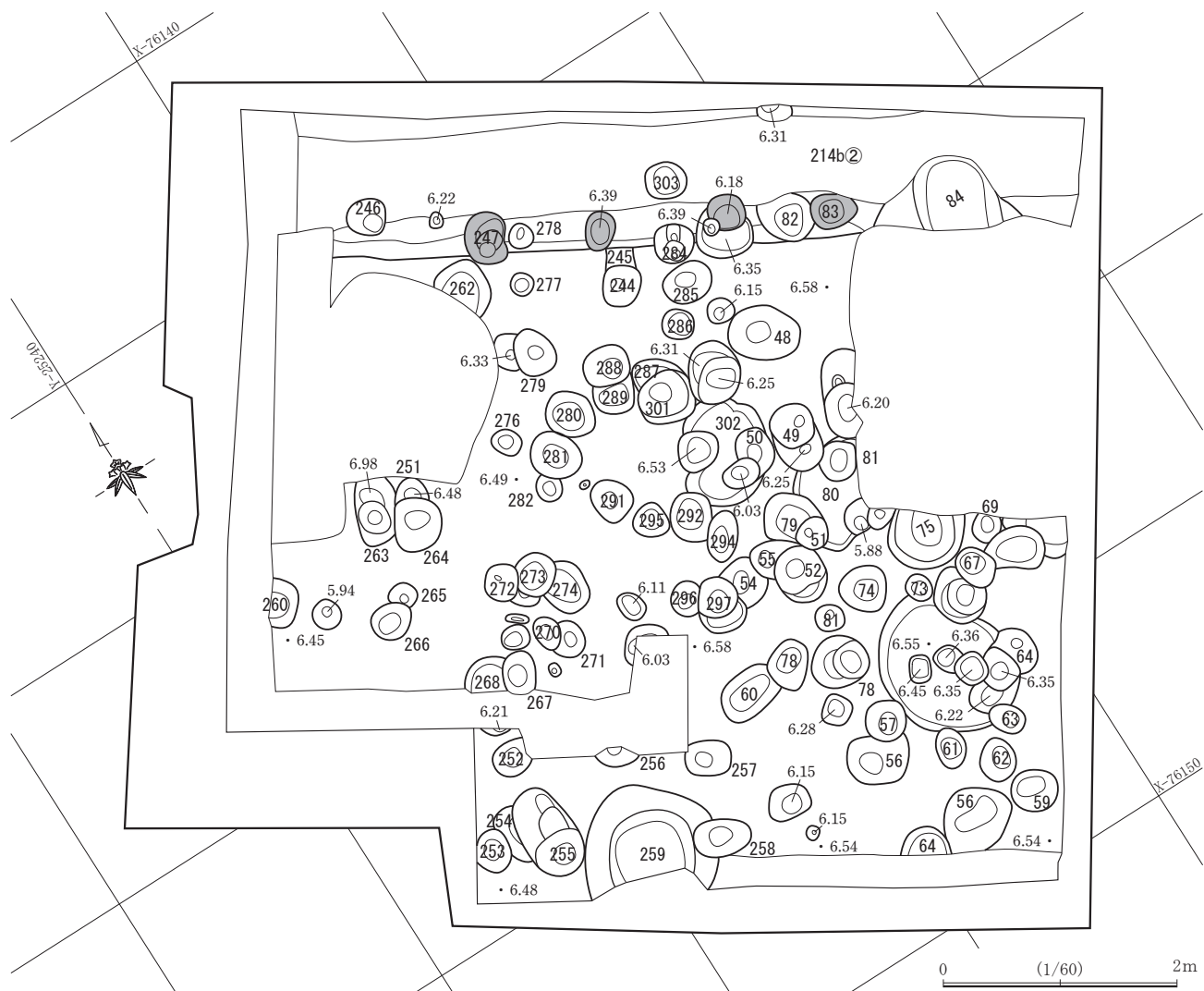


図 8 3b 面 全体図

3b 面遺構の底面標高

遺構 No.	底面標高 (m)	遺構 No.	底面標高 (m)	遺構 No.	底面標高 (m)	遺構 No.	底面標高 (m)	遺構 No.	底面標高 (m)	遺構 No.	底面標高 (m)	遺構 No.	底面標高 (m)
48	6.15	60	6.15	76	6.01	246	5.95	260	6.23	270	6.31	280	6.41
49	6.18	61	6.22	79	6.48	247	6.05	262	6.33	271	6.17	281	6.35
50	6.26	62	6.28	80	6.52	252	6.36	263	6.01	272	6.23	282	6.23
51	6.40	63	6.39	81	6.08	253	6.17	264	6.29	273	6.08	284	6.06
52	6.27	64	6.38	82	6.32	255	5.89	265	6.32	274	6.35	285	6.10
54	6.24	67	6.32	83	6.24	256	5.96	266	6.27	276	6.19	286	6.36
55	6.34	73	6.30	84	6.09	254	6.29	267	6.13	277	6.42	287	6.36
56	6.03	74	6.48	244	6.30	257	6.33	268	6.29	278	6.33	288	6.17
57	6.21	75	6.35	245	6.33	258	6.11	269	6.24	279	6.08	289	6.31
59	6.15											303	6.06

の混入が目立った。下部2層については土壌分析を外部機関に依頼し、最下層のサンプルからは少量の寄生虫卵と食用植物の花粉化石が検出されており、他の事例との類似性から糞便由来である可能性が指摘されている（付編参照）。

本遺構埋土より出土した遺物は、図 15-216～223 に示した。本地点では唯一木製品が良好な状態で遺存しており、黒色漆塗りで無文の碗・皿（218・219）や箸、草履芯（221～223）などが見られた。217 のロクロかわらけ大皿は細砂粒を多く含む胎土で硬質に焼き上がり、古手の様相を残している。

3 面下出土遺物 図 15-188～202 に、3a 面下から 4 面（IV a 層上面）までの掘り下げ時に出土した遺物を掲げた。

表 2 ①から出土かわらけの重量比を計算すると、大・小ともに手づくね成形品 77%、ロクロ成形品 22% という結果が得られ、3 面検出の道路側溝（遺構 214b ①）での数値が逆転している。陶磁器類では、龍泉窯系の青磁蓮弁文碗や常滑片口鉢Ⅱ類などが少数だが含まれている。

4 面（図 9）

IV a 層上面で検出された。標高 6.45～6.6 m を測り、南側が低い。ここで検出されたピット・土坑は 3b 面に帰属するものとし、埋土様相の異なる南北溝（遺構 300）のみを 4 面に帰属させて提示した。

遺構 300（南北溝） IV a 層上面より掘り込まれているが、埋土上層が IV a 層と非常に近似するため、IV b 層上面での確認となった。上幅は 70～80cm、底面幅は 40～50cm を測り断面は逆台形を呈する。

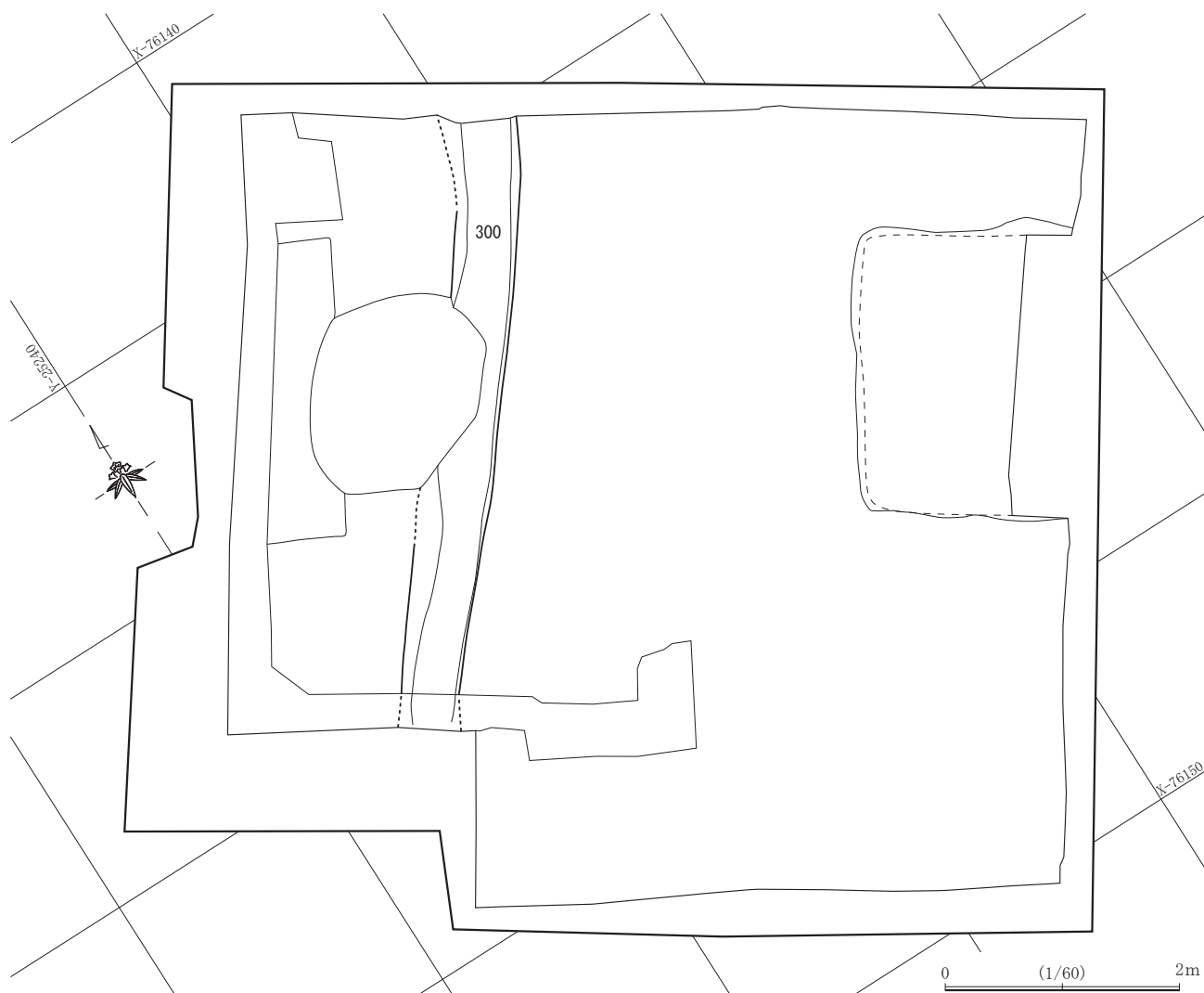


図 9 4 面 全体図

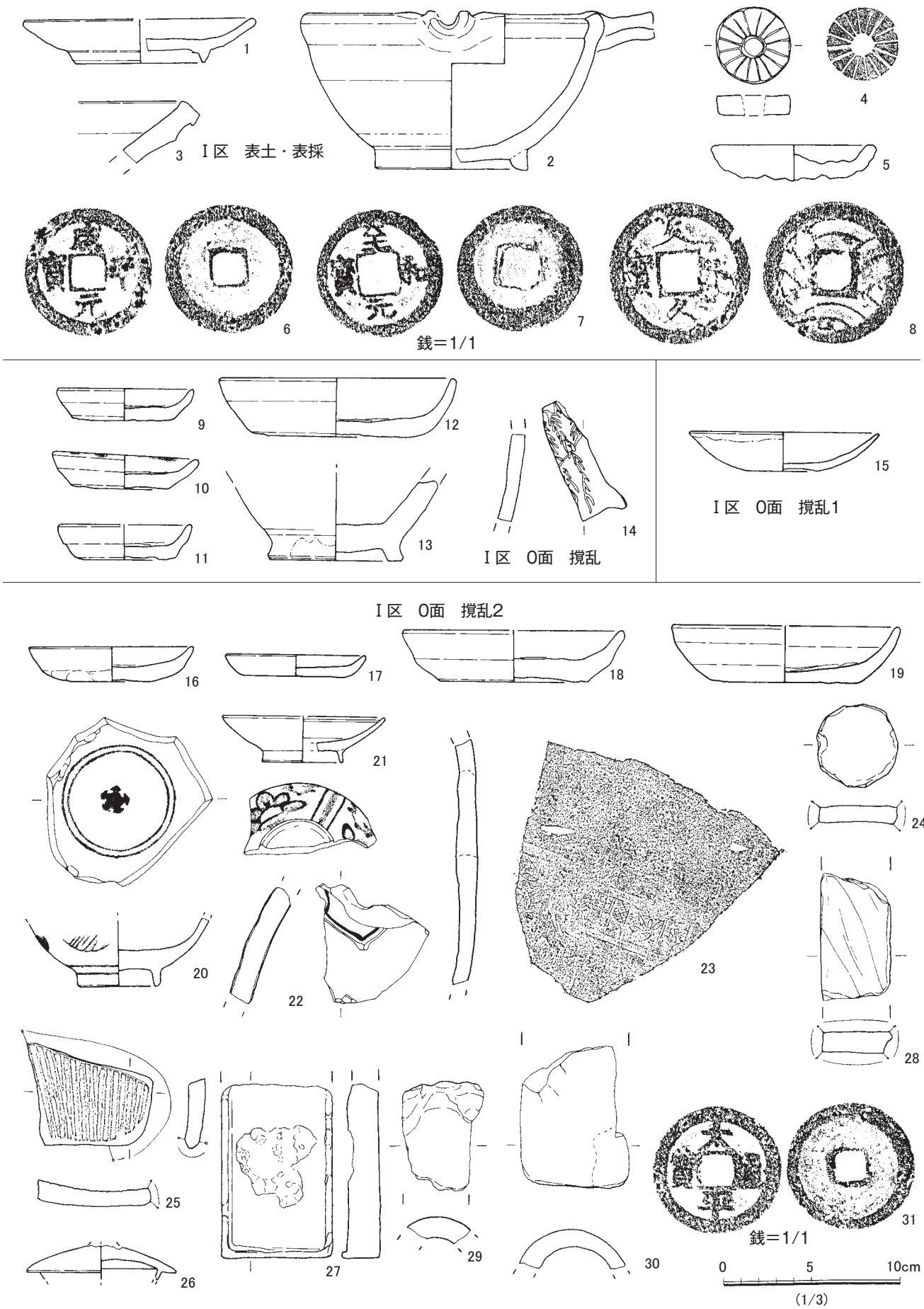
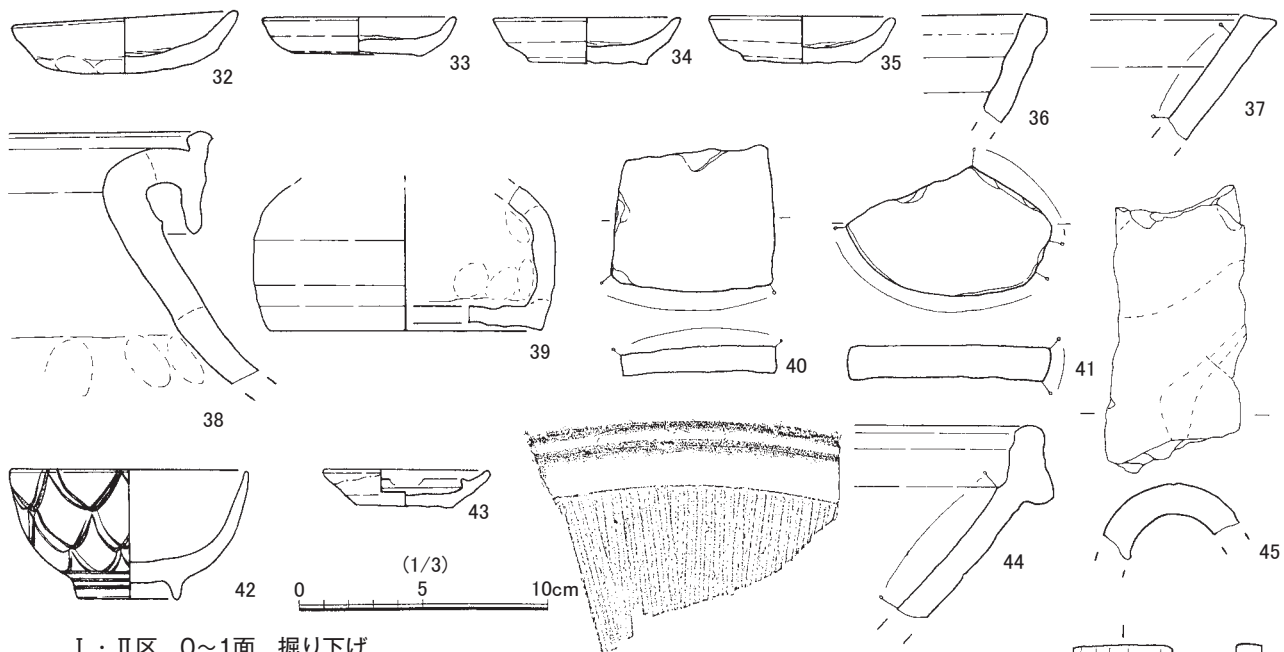


图 10 出土遺物 (1)



I・II区 0~1面 掘り下げ

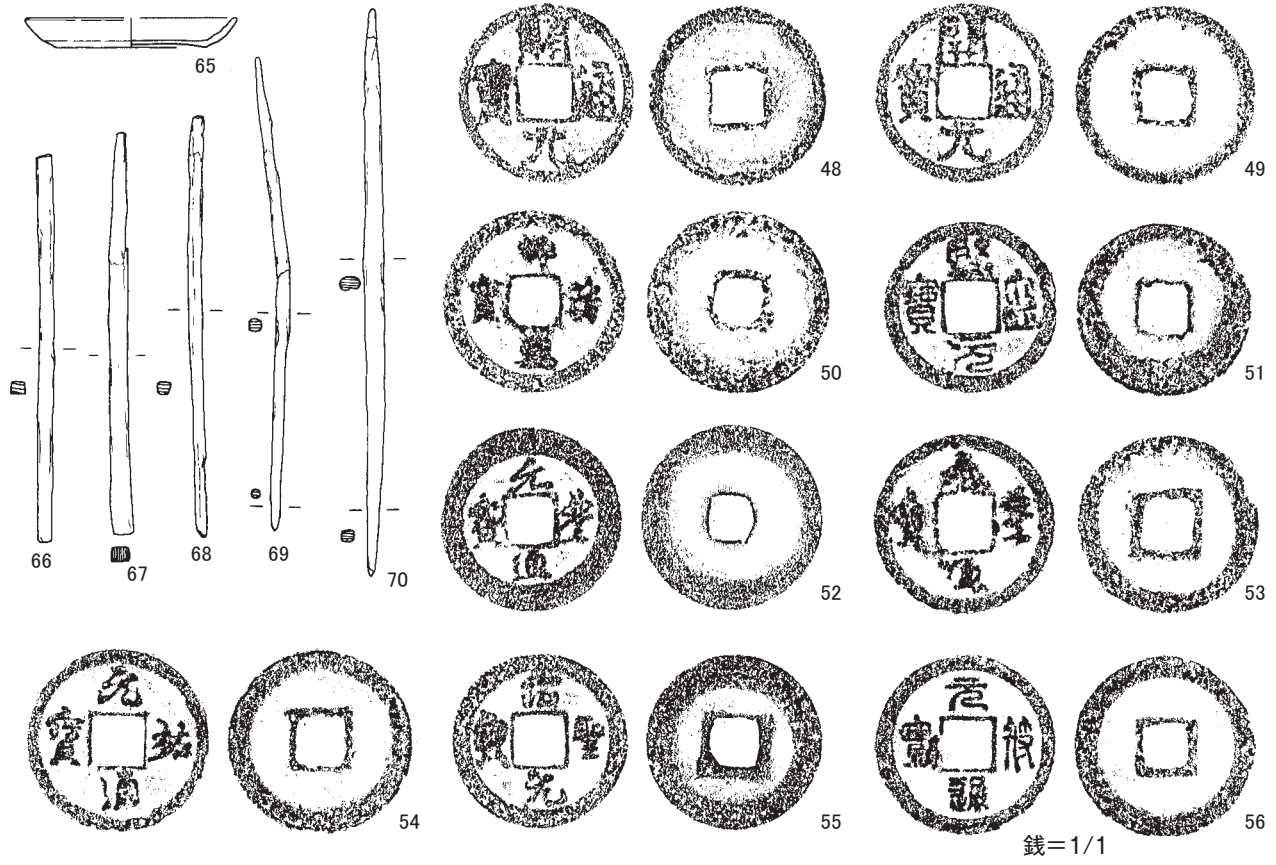
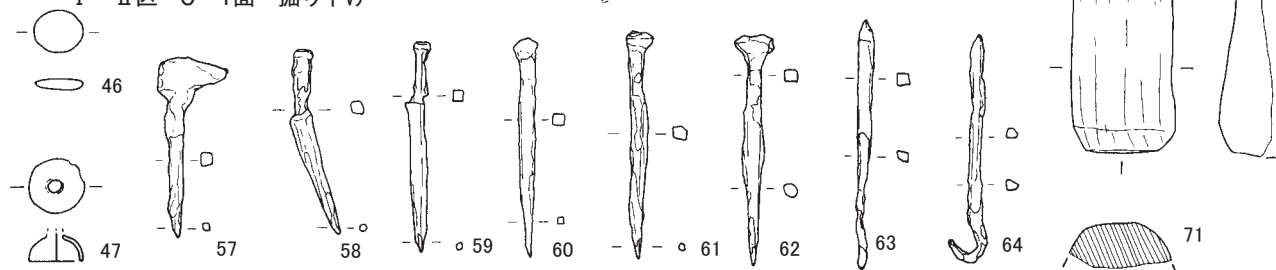


図 11 出土遺物 (2)

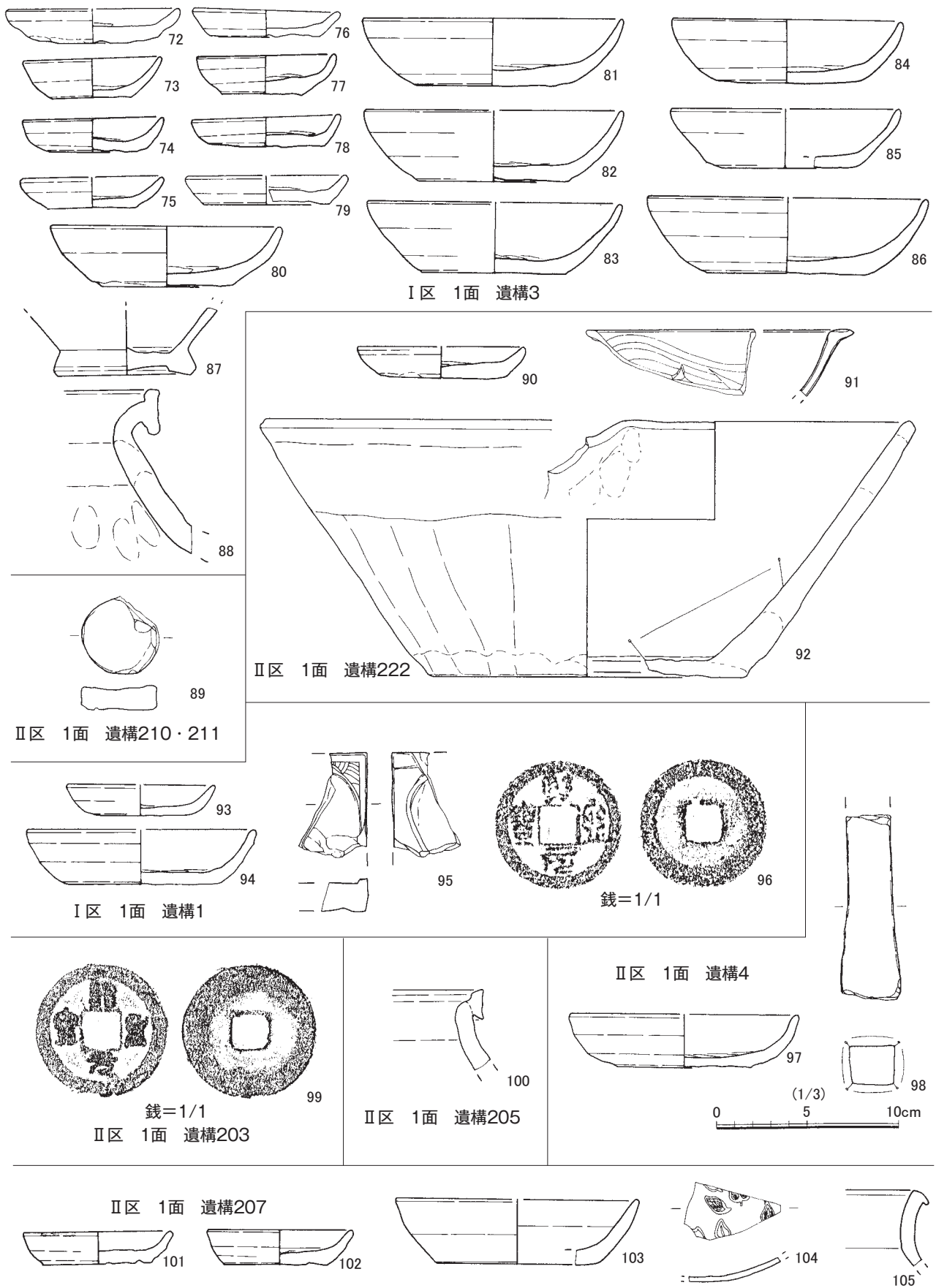


图 12 出土遺物 (3)

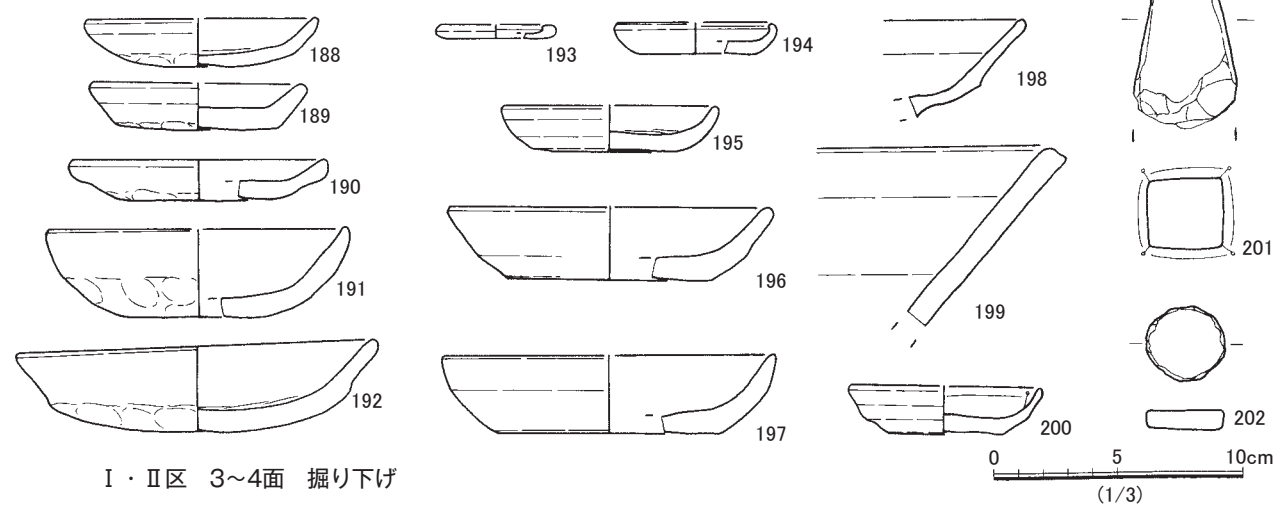
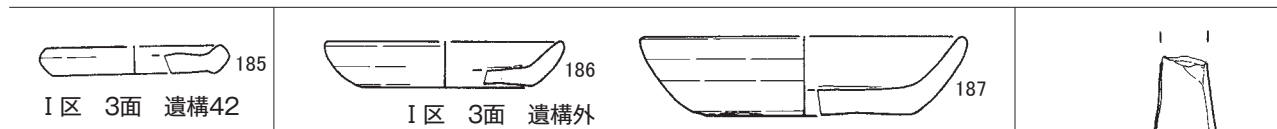
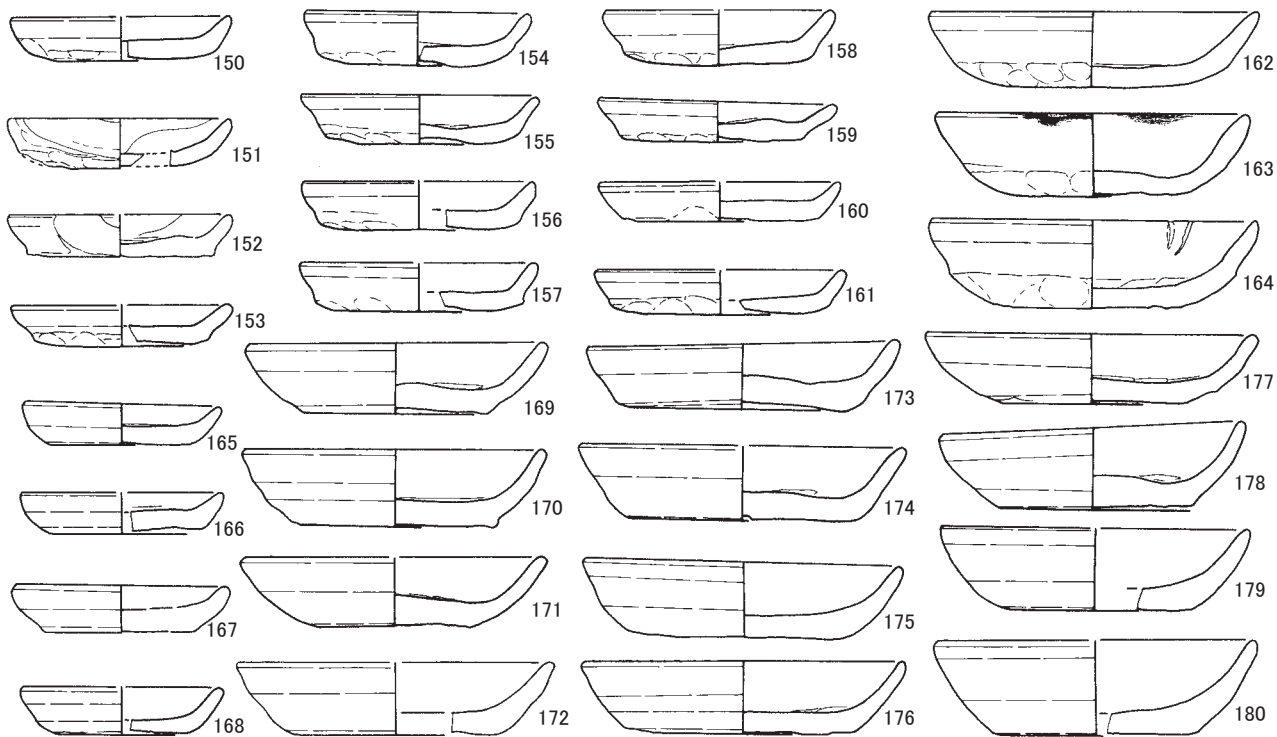
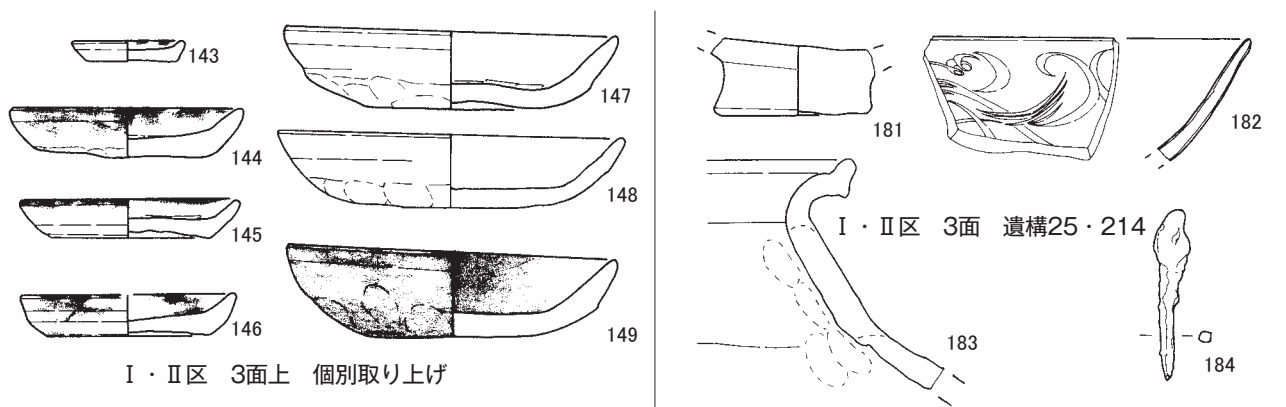


図 14 出土遺物 (5)

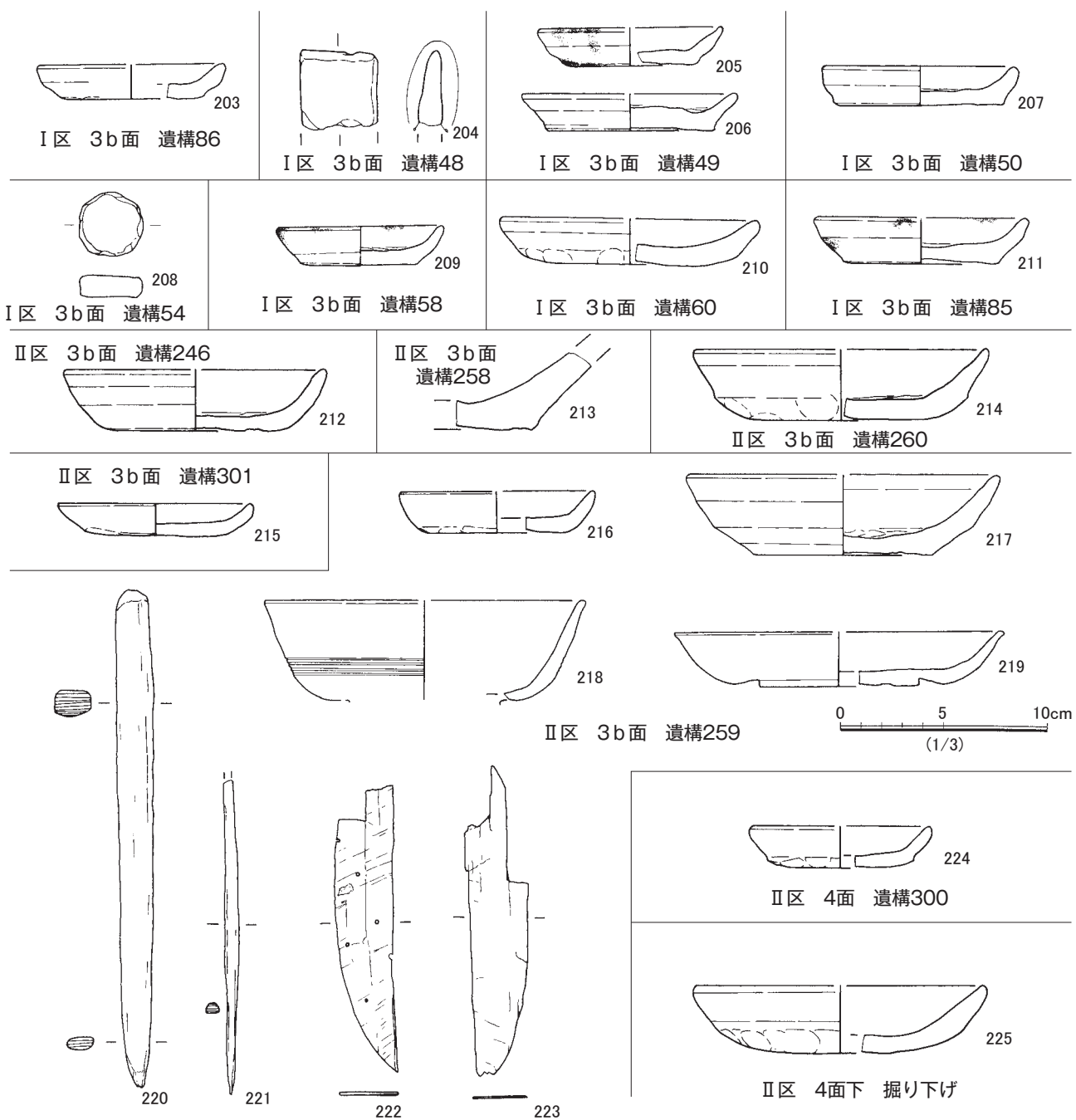


図 15 出土遺物 (6)

IV a層上面からの深さは50cmで、底面標高は5.95～6.05 mを測り南へ向けてわずかに下がる。底面の中心ラインはN37° Eを指し、上層の遺構より7°ほど東に振れている。

本遺構から出土した遺物は手づくねかわらけ小皿の小片1点のみで(表2④)、図15-224に示した。

4面下出土遺物 IV a層～IV b層の掘り下げ時に出土した遺物であるが、調査で見落としてしまった中世遺構の包含遺物が含まれている可能性もある。表2①からは手づくねかわらけが数量的に最も多いことが分かり、奈良～平安時代の土師器も数点出土している。龍泉窯系の青磁蓮弁文碗は新しい要素であり、中世遺構からの混入かもしれない。図15-225には手づくねかわらけの大皿1点を示した。今回は細別できなかったが、IV a層でも下位は締まりが強くなり、無遺物層となる可能性がある。

第五章 調査成果のまとめ

ここまで、中世に属する5枚の遺構面と、そこから出土した遺物について説明してきた。本地点では3b面より上層において、調査区北壁際に沿って東西道路が検出された。路面自体は最大でも60cm幅を検出できたに留まるが、路面幅については周辺での調査事例が参考となる。前稿(押木2011)と記載が重複するが、まずは道路の展開状況について概観しておきたい。

検出された道路の所産時期について、路面構築土からの出土遺物は殆どないが、第3a面に帰属する道路側溝(遺構214b①)の底面ではかわらけ集積が検出されており、図示できた資料の中では小皿は全て手づくね成形品で、大皿は殆どがロクロ成形品で占められていた。前章で述べたように、旧段階の側溝を含めた遺構214b全体でのかわらけの重量比を見ると、大で86%、小では67%をロクロ成形品が占めていた。これに、小片資料だが龍泉窯系の青磁劃花文碗や常滑5型式の甕が伴っている。手づくねかわらけの終焉時期については研究者間で見解が分かれるが、遺物総体の傾向は13世紀前半を大きく下らない。かわらけ集積が改修後の側溝に伴うことを考えると、13世紀前葉頃には路面構築とともに開削されたことが推測できる。

図16は米町遺跡をはじめ、周辺の主な調査地点を地図上に落とししたものである。地点bでは大きく4時期の中世遺構群が検出され、13世紀第2四半期～14世紀代に比定される2・3期では東西道路と、その南側溝が検出されている。計6枚の路面が連続と構築され、幅8.8m以上を測る大規模な道路遺構であるが、それに比して南側溝は幅60cm、深さ40cmと小規模である。走方向は、N62°Wを指す。この点をはじめ、新しい段階(2期)には側溝が一部路面に覆われ不明瞭となる点、また、鎌倉時代初期と考えられる4期では未だ道路が築造されていない点など、本地点の道路遺構とも共通する要素が多い。地点cでも、この延長部分と考えられる8枚の泥岩整地面が確認されており、路面の高さや構築方法の近似性から、地点bの道路と連続するものとみて大過ない。

上記2地点と本地点の道路遺構は、地図上ではさほど違和感なく結び付けることが可能である。ただ、



図 16 周辺調査地点および道路推定ライン(鎌倉市発行 1:2,500 都市計画基本図を使用)

両者間は 200 m も離れているため、現時点では「概ね走行ラインが一致する」という程度の評価を補う意味しかないだろう。先に掲げた路面の構築方法や側溝の構造・変遷といった点についての共通性も、双方について諸要素の精査を行なった上で改めて検討する必要があるだろう。当然のことながら、この間の延長線上にある新たな発掘成果についても、留意が必要である。

仮に両道路跡が繋がるものとして、これが中世の「大町大路」といえるのか、大きな問題点である。中世の大町大路については史料解釈では定説に至っておらず、夷堂橋以南の南北道が大町大路に当てる見方もある（『新編相模国風土記稿』など）。中世の都市遺跡である鎌倉では大小さまざまな規模の道路遺構が発見されているが、これらを史料上に残る道路名称と符合させることは、非常に困難と言わざるを得ない。今後も、史料解釈を通じて地道に検討を重ねるべき課題といえる。

なお、名越ヶ谷遺跡の地点 e では調査区の南端部で東西に延びる通路状遺構が検出されており、仮にこれを本地点の道路遺構と一連のものと考えたとすると路面幅だけで 30 m に達することになり、若宮大路に匹敵する規模となる。報告書の記載内容をもても、構造的に地点 a～c の道路遺構と同一視できるものとは考え難く、現時点では同地点よりも南側に道路の北辺があったと考えてよいだろう。大町四ツ角の南東側にある地点 f では、調査区の北東角で南北に延びる通路状遺構（泥岩整地面）が検出されたのみで、調査区の全域を覆う数段階に及ぶ泥岩地業は確認されていない。地点 a～c の推定道路ライン上にあり、これ以西へも直線で延びるとすれば、その幅は 12 m 以下の値となる。仮定の積み上げに過ぎないが、参考例として提示した。ちなみに、地点 h では上幅が 4 m を測る東西溝が検出され、開削当初は素掘りであったものが 13 世紀第 1 四半期以降には木組み護岸や橋脚の可能性も指摘される大型柱材が追加されるようになる。規模の大きさや護岸の構築技法にみられる高い規格性は、小町大路や横大路の側溝に類似するものとして、報告書では「車大路」との関連性が指摘されている。

いずれにしても、地点 b・c における大規模な道路が都市鎌倉にあって主要な交通機能を担っていたことは間違いなく、そこには当然「大町大路」との関わりも視野に入ってくる。本地点の成果も、中世鎌倉の都市構造を考える上で、重要な価値を有している。

各遺構面の年代観について、1 面は井戸（遺構 3）の埋土から出土した遺物をもとに、14 世紀前半頃には廃絶に向かっていたものと見ている。3a 面は土間状遺構の面上や先述の道路側溝（遺構 214b ①）から出土したかわらけに一定量の手づくねかわらけが含まれる点から、13 世紀前半と考えた。従って、2 面は 1 面と 3 面の中間を取って 13 世紀後半頃と理解できようか。3b 面では円筒状の土坑（遺構 259）から古手の名残を留めるロクロかわらけや無文の漆器椀・皿が出土するなど、全体として鎌倉時代初期に近い遺物様相を見せている。層位的に同一面となる 4 面は、南北溝（遺構 300）で手づくねかわらけが 1 点出土したのみで評価が難しいが、4 面から 3b 面の遺構群は 13 世紀初頭～前葉の年代幅で構築が進んだものと考えておきたい。なお、調査区の南端部では南に下がる江戸時代の落ち込みが検出されている。覆土中からは多量の陶磁器が出土しており、近世における当地区の生活ぶりを知るうえで貴重な資料が得られた。本地点では 14 世紀以降、近世の間を繋ぐ遺構は確認できなかったが、県道を挟んだ北側の地点 e では 15 世紀に属する溝や土坑が検出され、天目茶碗や瓦質湯釜、茶臼などの喫茶道具が一定量出土している点、寺院地や屋敷地の一角であった可能性を示唆している。

4 面下（IV a 層）掘り下げ時には中世遺物に混じって奈良～平安時代の土師器も少量出土している。本地点の北を東西に走る県道鎌倉・葉山線については、その前身を宝亀二年（771）以前の東海道駅路にまで遡らせる見解があるが（藤沢市 1997）、考古学上の証跡を得るには至っていない。海側に視界の開けた丘陵裾部の微高地という立地は古代においても居住や交通に関わる施設を置くうえで好条件

にあったことが想像でき、鎌倉における古代遺跡の分布や旧地形の復元研究を目にするにつけ、ある種の説得力をもつ所見であるとは感じている。ただ、その可否は今後の発掘調査に委ねるしかない。

引用・参考文献

- 押木弘己 2011 「調査速報 米町遺跡の調査」『かまくら考古』第10号 特定非営利活動法人鎌倉考古学研究所
- 押木弘己 2014 「米町遺跡 大町二丁目2311番5地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書30(第2分冊)』鎌倉市教育委員会(図16-地点f)
- 菊川英政 1995 「名越ヶ谷遺跡 大町三丁目1217番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11(第1分冊)』鎌倉市教育委員会(図16-地点e)
- 齋木秀雄・降矢順子 2000 『米町遺跡—第6地点、第7地点発掘調査報告書—』鎌倉市米町遺跡発掘調査団(図16-地点c)
- 齋木秀雄、他 2005 『米町遺跡発掘調査報告書—第10地点—』有限会社 鎌倉遺跡調査会(図16-地点b)
- 藤沢市教育委員会 1997 『神奈川の古代道』
- 馬淵和雄 1995 「米町遺跡 大町二丁目2315番外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11(第1分冊)』鎌倉市教育委員会(図16-地点g)
- 馬淵和雄、他 2004 「米町遺跡 大町二丁目2324番1外」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20』鎌倉市教育委員会(図16-地点i)
- 馬淵和雄 2008 「米町遺跡 大町二丁目2235番3地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書24』鎌倉市教育委員会(図16-地点h)
- 馬淵和雄ほか 2011 「下馬周辺遺跡 大町二丁目1001番4地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書27(第1分冊)』鎌倉市教育委員会
- 宮田 眞、他 1999 『米町遺跡発掘調査報告書 鎌倉市大町2丁目2338番1』米町遺跡発掘調査団
- 高柳光寿 1959 『鎌倉市史 総説編』鎌倉市

表1 出土遺物観察表

遺物番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
出土遺物(1) (図10)						
1	陶器	瀬戸・美濃系皿	(12.6)	(7.0)	2.5	1/3 胎土:灰色 黒色粒 釉調:灰緑色 内底面に重ね焼き痕
2	陶器	瀬戸・美濃系片口?	(17.6)	(7.6)	9.0	1/3 胎土:灰色 黒色粒 釉調:黄褐色
3	陶器	常滑片口鉢Ⅱ類	—	—	[3.5]	口小片 胎土:長石 色調:褐灰色
4	石製品	用途不明	直径4.2	孔径1.0	厚さ1.1	完形 上面?を刻線により16分割
5	鉄製品	皿	8.2	—	2.0	略完形 全体に錆び顕著
6	銅製品	銭	直径2.4	孔径0.7	厚さ0.1	咸平元寶 中国北宋代・998年初鑄
7	銅製品	銭	直径2.4	孔径0.8	厚さ0.1	至和通寶(真書) 中国北宋代・1054年初鑄
8	銅製品	銭	直径2.7	孔径0.7	厚さ0.1	文久永寶 江戸時代・文久二年(1862)初鑄
9	土器	ロクロかわらけ・小	7.6	5.6	1.8	4/5 胎土:白色針状物質、黒色粒 色調:橙色 外底面に板状圧痕
10	土器	ロクロかわらけ・小	8.2	5.5	1.9	1/2 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:にぶい黄褐色 外底面に板状圧痕
11	土器	ロクロかわらけ・小	(7.4)	(5.7)	2.0	1/2 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:橙色 外底面に板状圧痕
12	土器	ロクロかわらけ・大	13.2	8.8	3.3	1/2 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:にぶい黄褐色 外底面に板状圧痕
13	磁器	白磁瓶類	—	5.8	[4.5]	底完存 胎土:灰白色 黒色粒 釉調:灰緑色
14	磁器	高麗青磁壺	—	—	—	胴小片 胎土:灰色、精良 黒・白色粒 釉調:緑灰色 外面に象嵌(枝垂れ柳?)
15	陶器	瀬戸・美濃系皿	10.7	3.2	2.2	1/2 胎土:灰白色 釉調:灰色 体下部回転ヘラケズリ
16	土器	手づくねかわらけ・小	9.2	—	2.0	1/3 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:黄褐色
17	土器	ロクロかわらけ・小	7.8	10.6	1.3	2/3 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:橙色
18	土器	ロクロかわらけ・大	12.4	8.1	2.9	1/3 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:橙色 外底面に板状圧痕
19	土器	ロクロかわらけ・大	(12.7)	8.4	3.2	2/3 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:淡褐色
20	磁器	肥前系染付碗	—	(4.2)	[3.8]	底完存 胎土:灰白色 黒色粒 釉調:白色 内外面に絵付け
21	磁器	肥前系染付皿	(9.2)	(4.6)	2.7	1/3 胎土:灰白色 黒色粒 釉調:白色 内外面に絵付け
22	磁器	高麗青磁壺	—	—	—	胴小片 胎土:灰色、黒・白色粒を含み精良 釉調:緑灰色 外側に象嵌
23	陶器	常滑甕	—	—	—	頸小片 胎土:長石、小石粒 色調:褐灰色 花と他2種類の模様のかさなったスタンプが施されている
24	陶器	常滑転用研磨具	直径4.6	—	厚さ0.9	甕胴部片を転用 割れ口の二辺が摩耗 胎土:灰色 黒色粒 色調:灰褐色
25	陶器	堺・明石系転用研磨具	長さ6.4	幅5.5	厚さ1.1	挿鉢体部片を転用 割れ口の三辺が摩耗
26	瓦質土器	蓋	—	—	[1.9]	摘み、受端部欠損 胎土:灰色 白色粒 色調:黒褐色
27	石製品	硯	長さ[9.8]	幅6.3	高さ2.2	4/5 陸の表面が部分的に剥落 色調:灰色
28	石製品	砥石	長さ[7.2]	幅4.0	厚さ1.3	仕上砥 両端欠損 四辺が摩耗 色調:灰色
29	土製品	輪羽口	長さ[6.2]	外径(6.0)	孔径(4.6)	1/6周 炉体との接合部溶解
30	土製品	輪羽口	長さ[7.8]	外径(6.0)	孔径(4.8)	1/3周 炉体との接合部溶解
31	銅	銭	直径2.3	孔径0.6	厚さ0.1	太平通寶 中国北宋代・976年初鑄
出土遺物(2) (図11)						
32	土器	手づくねかわらけ・小	8.9	—	2.3	1/2 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:にぶい黄褐色
33	土器	ロクロかわらけ・小	7.7	5.1	1.5	1/2 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:橙色
34	土器	ロクロかわらけ・小	7.4	4.7	2.0	完形 51g 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:にぶい黄褐色

遺物 番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
35	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	4.8	2.0	完形 54g 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:にぶい黄橙色 外底面に板状圧痕
36	陶器	濃青釉 植木鉢?	—	—	—	体小片、傾き不詳 胎土:にぶい黄褐色 黒色粒 釉調:青白色
37	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	—	—	[5.0]	口小片 胎土:長石 色調:赤褐色 7~8型式か
38	陶器	常滑 甕	—	—	[9.5]	口小片 胎土:長石 色調:褐色 7型式か
39	陶器	常滑 壺	—	(10.9)	[5.7]	下部1/4 胎土:長石、黒色粒 色調:褐灰色 蔦口壺か
40	陶器	常滑 転用研磨具	長さ 6.4	幅 5.6	厚さ 1.0	甕胴部片を転用 胎土:長石、黒色粒 色調:明灰色 割れ口一辺と外面が磨耗
41	陶器	常滑 転用研磨具	長さ 8.2	幅 5.1	厚さ 1.3	甕胴部片を転用 胎土:長石、黒色粒 色調:赤褐色 割れ口二辺が磨耗
42	磁器	肥前系 染付碗	9.4	5.3	4.0	2/3 胎土:白色 黒色粒 釉調:透明釉 外面に二重網目文
43	陶器	瀬戸・美濃系 灯明油受皿	6.5	3.9	1.5	完形 胎土:灰黄色、密 釉調:黒褐色
44	陶器	堺・明石系 播鉢	—	—	[7.3]	口小片 胎土:密 色調:赤褐色 内面に9条一単位の櫛目
45	土製品	鞆羽口	長さ [10.5]	直径 (6.0)	孔径 (3.8)	1/3周 炉体との接合部熔解
46	石製品	基石?	長さ 2.0	短径 1.7	厚さ 0.5	完形 2g
47	銅製品	用途不明	直径 2.0	孔径 0.5	高さ [1.1]	一部欠損 [5]g
48	銅製品	銭	直径 2.3	孔径 0.7	厚さ 0.1	開元通寶 中国唐代・621年初鑄
49	銅製品	銭	直径 2.3	孔径 0.7	厚さ 0.1	開元通寶(隸書) 中国唐代・621年初鑄
50	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	祥符通寶(行書) 中国北宋代・1008年初鑄
51	銅製品	銭	直径 2.3	孔径 0.7	厚さ 0.1	熙寧元寶(篆書) 中国北宋代・1068年初鑄
52	銅製品	銭	直径 2.3	孔径 0.7	厚さ 0.1	元豊通寶(行書) 中国北宋代・1078年初鑄
53	銅製品	銭	直径 2.3	孔径 0.7	厚さ 0.1	元豊通寶(行書) 中国北宋代・1078年初鑄
54	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	元祐通寶(行書) 中国北宋代・1086年初鑄
55	銅製品	銭	直径 2.3	孔径 0.8	厚さ 0.1	紹聖通寶(行書) 中国北宋代・1094年初鑄
56	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	元符通寶(篆書) 中国北宋代・1098年初鑄
57	鉄製品	釘	長さ 7.2	幅 0.5	厚さ 0.5	完形 9g
58	鉄製品	釘	長さ 7.6	幅 0.8	厚さ 0.5	完形 9g
59	鉄製品	釘	長さ 8.4	幅 0.6	厚さ 0.4	完形 9g
60	鉄製品	釘	長さ 8.8	幅 1.0	厚さ 0.5	完形 10g
61	鉄製品	釘	長さ 9.1	幅 1.1	厚さ 0.4	完形 9g
62	鉄製品	釘	長さ 9.1	幅 0.7	厚さ 0.5	完形 13g
63	鉄製品	釘	長さ 10.1	幅 0.6	厚さ 0.5	完形 9g
64	鉄製品	掛け金具?	長さ 10.3	幅 0.5	厚さ 0.4	完形 9g
65	木製品	漆器 皿	(8.4)	6.0	1.2	1/2 内外面黒色系漆塗り
66	木製品	用途不明	長さ 15.6	幅 0.7	厚さ 0.5	完形? 角棒
67	木製品	用途不明	長さ 16.2	幅 0.9	厚さ 0.6	完形? 角棒
68	木製品	用途不明	長さ 16.8	幅 0.6	厚さ 0.5	完形? 角棒
69	木製品	箸	長さ 19.0	幅 0.6	厚さ 0.5	完形

遺物番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
70	木製品	箸	長さ 22.7	幅 0.8	厚さ 0.5	完形
71	木製品	用途 栓?	長さ 6.4	幅 [4.2]	厚さ [1.8]	1/3程度?
出土遺物(3) (図12)						
72	土器	手づくね かわらけ・小	(9.3)	—	1.9	1/3 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:淡橙色
73	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	4.3	2.2	略完形 [45]g 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:橙色 外底面に板状圧痕
74	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	4.9	1.8	1/3 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:にぶい黄橙色 外底面に板状圧痕
75	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.6)	4.9	1.7	1/2弱 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:にぶい黄橙色 外底面に板状圧痕
76	土器	ロクロ かわらけ・小	7.9	6.2	1.6	4/5 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:にぶい黄橙色 外底面に板状圧痕
77	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	4.4	2.2	1/2 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:にぶい黄橙色 外底面に板状圧痕
78	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	6.1	1.8	1/2 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:灰黄色 外底面に板状圧痕
79	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.7)	(7.0)	1.6	1/3 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:にぶい黄橙色
80	土器	ロクロ かわらけ・大	12.3	7.4	3.3	略完形 [190]g 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:にぶい黄橙色 外底面に板状圧痕
81	土器	ロクロ かわらけ・大	14.1	8.1	3.7	1/2 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:橙色 外底面に板状圧痕
82	土器	ロクロ かわらけ・大	(14.0)	8.1	3.9	1/4 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:橙色 外底面に板状圧痕
83	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.8)	(8.0)	3.9	1/4 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:橙色 外底面に板状圧痕
84	土器	ロクロ かわらけ・大	12.4	7.8	3.5	略完形 [179]g 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:灰黄色
85	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.4)	6.8	3.3	1/4 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:にぶい黄橙色
86	土器	ロクロ かわらけ・大	(15.2)	8.6	4.2	1/2弱 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:橙色 外底面に板状圧痕
87	磁器	白磁 瓶類	—	7.2	[3.6]	底完存 胎土:灰色、精良 黒色粒 釉調:明緑灰色
88	陶器	常滑 甕か壺	—	—	[9.0]	口小片 胎土:黒色粒 色調:灰褐色 6a型式
89	土製品	円盤	直径 4.2	—	厚さ 1.2	一部欠損 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:にぶい黄橙色
90	土器	手づくね かわらけ・小	9.1	—	1.9	1/2 胎土:雲母、黒色粒 色調:淡橙色/橙色
91	磁器	青磁 折縁皿(坏)?	—	—	[3.7]	口小片 胎土:灰白色で精良 黒色粒 釉調:明緑灰色 龍泉窯系 I-2類
92	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	(35.3)	(17.5)	14.0	1/4 胎土:黒・白色粒 色調:灰褐色 体~底部内面磨耗 5~6a型式
93	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.0)	(5.2)	1.7	1/4 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:にぶい黄橙色
94	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.4)	(8.0)	3.0	1/2 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:橙色 外底面に板状圧痕
95	石製品	硯	長さ [5.8]	幅 [3.7]	高さ 1.8	両面が硯面? 表面の外縁に線刻画
96	銅製品	銭	直径 2.2	孔径 0.6	厚さ 0.1	熙寧元寶(篆書) 中国北宋代・1068年初鑄
97	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.4)	(7.4)	2.9	1/3 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:淡橙色 外底面に板状圧痕
98	石製品	砥石	長さ [10.0]	幅 3.2	厚さ 2.1	一端欠損 中砥(合掌寺砥) 石材:凝灰岩 色調:灰白色 4面使用
99	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	紹聖元寶(篆書) 中国北宋代・1094年初鑄
100	陶器	常滑 甕	—	—	[4.4]	口小片 色調:灰褐色 6a型式
101	土器	ロクロ かわらけ・小	8.1	6.0	1.8	4/5 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:橙色 外底面に板状圧痕
102	土器	ロクロ かわらけ・小	7.9	2.0	5.7	4/5 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:淡橙色 外底面に板状圧痕
103	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.2)	(9.0)	3.6	1/4 胎土:白色針状物質 色調:にぶい赤褐色
104	磁器	白磁 皿	—	—	—	口小片、傾き不詳 胎土:白色 黒色粒 釉調:灰白色 内面型押しによる陽刻(木の葉文)

遺物番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
105	陶器	常滑壺	—	—	[4.1]	口小片 胎土:長石、白色粒 色調:赤灰色
出土遺物(4) (図13)						
106	土器	ロクロかわらけ・小	(7.8)	(3.8)	2.2	1/3 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:橙色 外底面に板状圧痕
107	土器	ロクロかわらけ・小	(8.0)	(5.8)	1.7	1/4 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:にぶい黄橙色 外底面に板状圧痕
108	土器	ロクロかわらけ・大	12.2	7.8	3.2	1/2 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:橙色
109	石製品	砥石	長さ [8.4]	幅 3.4	厚さ 2.1	中砥 両端欠損 3面を使用
110	石製品	砥石	長さ [5.2]	幅 4.1	厚さ 0.8	仕上砥 一端欠損 1面を使用
111	銅製品	銭	2.4	0.7	0.1	開元通寶(隸書) 中国唐代・621年初鑄
112	銅製品	銭	2.4	0.7	0.1	皇宋通寶(篆書) 中国北宋代・1038年初鑄
113	土器	ロクロかわらけ・小	8.0	6.2	1.7	4/5 胎土:雲母、黒色粒 色調:にぶい黄橙色
114	土器	ロクロかわらけ・小	(8.2)	(6.0)	1.7	1/4 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:淡橙色
115	土器	ロクロかわらけ・大	(12.4)	8.9	3.4	1/3 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:淡橙色 外底面に板状圧痕
116	陶器	常滑甕	—	—	[10.8]	口小片 胎土:長石、黒色粒 色調:褐灰～赤褐色 6型式
117	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.6	厚さ 0.1	咸平元寶 中国北宋代・998年初鑄
118	土器	ロクロかわらけ・大	12.8	7.4	3.8	1/3 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:橙色 外底面に板状圧痕
119	銅製品	銭	2.4	0.7	0.1	政和通寶(隸書) 中国北宋代・1111年初鑄
120	銅製品	銭	2.4	0.7	0.1	紹聖元寶(行書) 中国北宋代・1094年初鑄
121	土器	ロクロかわらけ・小	(9.0)	(6.7)	1.9	1/3 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:にぶい黄橙色 外底面に板状圧痕
122	銅製品	銭	2.1	0.7	0.1	開元通寶 中国唐代・621年初鑄
123	土器	ロクロかわらけ・大	(12.7)	(8.8)	3.2	1/6 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:橙色 外底面に板状圧痕
124	土器	手づくねかわらけ・小	(8.9)	—	2.2	1/2弱 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:にぶい黄橙色
125	土器	手づくねかわらけ・小	(10.1)	—	1.5	1/2弱 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:にぶい黄橙色
126	土器	手づくねかわらけ・大	12.8	—	3.5	1/2 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:にぶい黄橙色
127	土器	手づくねかわらけ・大	13.1	—	3.1	1/2 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:にぶい黄橙色
128	土器	ロクロかわらけ・小	(7.0)	(4.6)	1.7	1/2弱 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:橙色 外底面に板状圧痕
129	土器	ロクロかわらけ・小	(7.8)	(5.9)	1.7	1/2弱 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒、泥岩粒 色調:黄褐色 外底面に板状圧痕
130	土器	ロクロかわらけ・小	(7.7)	(5.7)	1.7	1/3 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:淡橙色 外底面に板状圧痕
131	土器	ロクロかわらけ・小	(7.8)	(5.0)	1.8	1/3 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:にぶい黄橙色
132	土器	ロクロかわらけ・小	(8.4)	(7.1)	1.6	1/3 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:にぶい橙色
133	土器	ロクロかわらけ・中	(11.0)	(6.5)	3.5	1/2弱 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:にぶい黄橙色 外底面に板状圧痕
134	土器	ロクロかわらけ・大	(11.8)	(7.9)	3.0	1/3 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:淡橙色
135	土器	ロクロかわらけ・大	(13.8)	(9.0)	3.4	1/4 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:淡橙色
136	土器	ロクロかわらけ・大	(13.0)	(8.0)	3.4	1/3 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:橙色 外底面に板状圧痕
137	磁器	白磁皿	—	—	—	口小片、傾き不詳 胎土:白色 黒色粒 釉調:青灰色 輪花形 内面に型押し of 陽刻花卉文?
138	陶器	渥美・湖西山茶碗?	—	—	[3.4]	口小片 胎土:黒色粒 色調:灰白色
139	銅製品	銭	直径 2.3	孔径 0.8	厚さ 0.1	開元通寶(隸書) 中国唐代・621年初鑄

遺物 番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
140	銅製品	銭	2.3	0.7	0.1	天聖元寶 (真書) 中国北宋代・1023年初鋳
141	土器	手づくね かわらけ・小	(8.8)	—	1.6	1/4 胎土:白色針状物質、黒色粒 色調:浅黄色
142	陶器	渥美・湖西 山茶碗	—	(6.2)	[2.1]	底1/4 胎土:白色粒 色調:灰色
出土遺物(5) (図14)						
143	土器	ロクロ かわらけ・極小	4.4	3.6	0.9	完形 12g 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:橙色 内折れ
144	土器	手づくね かわらけ・小	9.2	—	2.0	完形 91g 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:にぶい黄橙色
145	土器	ロクロ かわらけ・小	8.6	6.5	1.7	完形 71g 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:にぶい黄橙色 外底面に板状圧痕
146	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.4)	(6.6)	1.7	1/2弱 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:にぶい橙色 外底面に板状圧痕
147	土器	手づくね かわらけ・大	13.2	—	3.1	略完形 [207]g 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:にぶい褐色
148	土器	手づくね かわらけ・大	13.8	—	3.0	3/4 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:浅黄色
149	土器	手づくね かわらけ・大	13.1	—	3.4	完形 232g 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:にぶい黄橙色
150	土器	手づくね かわらけ・小	(8.6)	—	1.8	1/3 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:橙色
151	土器	手づくね かわらけ・小	8.7	—	2.1	1/2 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:浅黄色
152	土器	手づくね かわらけ・小	(8.8)	—	1.7	1/2 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:浅黄色
153	土器	手づくね かわらけ・小	(8.8)	—	1.7	1/3 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:橙色～淡橙色
154	土器	手づくね かわらけ・小	(8.9)	—	2.2	1/2 胎土:白色針状物質、雲母、黒・白・赤色粒 色調:にぶい黄橙色
155	土器	手づくね かわらけ・小	9.4	—	2.0	1/2 胎土:白色針状物質、雲母、黒・白色粒 色調:浅黄色
156	土器	手づくね かわらけ・小	(9.2)	—	2.0	1/4 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:黄灰色
157	土器	手づくね かわらけ・小	(9.3)	—	2.0	1/3 胎土:白色針状物質、雲母、黒・白色粒 色調:浅黄色
158	土器	手づくね かわらけ・小	(9.1)	—	1.8	1/2 胎土:白色針状物質、雲母、黒・白色粒 色調:浅黄色
159	土器	手づくね かわらけ・小	9.4	—	1.6	1/2 胎土:白色針状物質、雲母、黒・白色粒 色調:浅黄色
160	土器	手づくね かわらけ・小	(9.6)	—	1.6	1/2 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:浅黄色
161	土器	手づくね かわらけ・小	(10.0)	—	1.8	1/3 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:浅黄色
162	土器	手づくね かわらけ・大	13.0	—	3.1	1/2 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:にぶい黄橙色
163	土器	手づくね かわらけ・大	12.4	—	3.3	1/3 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:橙色～褐灰色
164	土器	手づくね かわらけ・大	(13.0)	—	3.5	1/2弱 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒、泥岩粒 色調:にぶい黄橙色
165	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.8	1.7	4/5 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:橙色 外底面に板状圧痕
166	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.0)	(5.0)	1.7	1/3 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:にぶい黄橙色 外底面に板状圧痕
167	土器	ロクロ かわらけ・小	8.5	6.0	1.9	1/2 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:にぶい黄橙色 外底面に板状圧痕
168	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.9)	(5.3)	1.9	1/2弱 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:にぶい赤褐色 外底面に板状圧痕
169	土器	ロクロ かわらけ・大	11.9	7.3	2.9	1/2 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:にぶい黄橙色
170	土器	ロクロ かわらけ・大	12.0	8.3	3.1	1/2 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:浅黄色 外底面に板状圧痕
171	土器	ロクロ かわらけ・大	(11.9)	(6.8)	2.8	1/2 胎土:白色針状物質、雲母、黒・白色粒 色調:浅黄色
172	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.6)	(8.3)	2.9	1/4 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:灰黄色 外底面に板状圧痕
173	土器	ロクロ かわらけ・大	11.7	9.5	2.7	4/5 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:浅黄色 外底面に板状圧痕
174	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.8)	9.2	3.0	1/3 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:浅黄色 外底面に板状圧痕

遺物 番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
175	土器	ロクロ かわらけ・大	12.6	9.1	3.0	1/3 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:にぶい黄橙色 外底面に板状圧痕
176	土器	ロクロ かわらけ・大	12.7	9.0	2.9	1/2 胎土:白色針状物質、雲母、黒・白・赤色粒・土丹粒 色調:淡橙色
177	土器	ロクロ かわらけ・大	13.1	7.8	2.8	1/2 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:浅黄色 外底面に板状圧痕
178	土器	ロクロ かわらけ・大	12.0	7.7	3.3	1/2 胎土:白色針状物質、雲母、黒・白・赤色粒 色調:浅黄色
179	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.4)	(7.8)	3.3	1/3 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:にぶい黄橙色 外底面に板状圧痕
180	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.7)	(8.2)	3.8	1/3 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:にぶい黄橙色 外底面に板状圧痕
181	土器	ロクロ かわらけ・大	—	6.3	[3.1]	底完存 柱状高台 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:黄橙色 外底面に板状圧痕
182	磁器	青磁 劃花文碗	—	—	[4.9]	口小片 胎土:灰白色で精良 黒色粒 釉調:明緑灰色 龍泉窯系 I-2類
183	陶器	常滑 甕	—	—	—	口小片、傾き不詳 胎土:黒色粒 色調:灰褐色/浅黄色 5型式
184	鉄製品	釘	長さ 6.9	幅 0.6	厚さ 0.4	完形 7g
185	土器	手づくね かわらけ・小	(7.0)	—	1.1	1/4 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:にぶい黄橙色
186	土器	ロクロ かわらけ・小	(9.4)	—	1.9	1/3 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:にぶい黄橙色 外底面に板状圧痕
187	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.8)	(8.9)	3.2	1/3 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:黄橙色
188	土器	手づくね かわらけ・小	9.2	—	2.0	1/2 胎土:白色針状物質、雲母、白・黒・赤色粒 色調:にぶい橙色だが、中央の内外部に灰赤色の焼きむら
189	土器	手づくね かわらけ・小	(8.4)	—	1.9	1/4 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:にぶい黄橙色
190	土器	手づくね かわらけ・小	(10.2)	—	1.7	1/4 胎土:雲母、黒色粒 色調:にぶい黄橙色
191	土器	手づくね かわらけ・大	(12.0)	—	3.6	1/2 胎土:白色針状物質、雲母、黒・赤色粒 色調:にぶい黄橙色
192	土器	手づくね かわらけ・大	14.3	—	3.4	1/2 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:にぶい黄橙色
193	土器	手づくね 白かわらけ極小	(4.6)	—	0.6	内折れ 1/3 胎土:黒色粒 色調:灰白色
194	土器	ロクロ かわらけ・小	(6.2)	(4.6)	1.3	内折れ 1/4 胎土:雲母、黒色粒 色調:にぶい黄橙色
195	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.6)	(6.2)	1.9	1/3 胎土:白色針状物質、黒色粒 色調:にぶい黄橙色
196	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.8)	(8.2)	3.0	1/4 胎土:白色針状物質、雲母、黒・赤色粒 色調:にぶい黄橙色
197	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.2)	(8.8)	3.2	1/2 胎土:白色針状物質、雲母、白・黒・赤色粒・土丹粒 色調:橙色
198	土器	ロクロ土師器 高台付付	—	—	[3.9]	口～体小片 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:にぶい黄橙色
199	陶器	常滑 片口鉢 I 類	—	—	—	口小片 胎土:褐灰色 白色粒 色調:褐灰色 内面に緑灰色の自然釉がかかる
200	陶器	山皿 東遠系	(7.6)	(4.2)	1.9	1/2 胎土:黒・白色粒 色調:灰色
201	石製品	砥石	長さ 8.7	幅 4.1	厚さ 2.8	中砥 残存率不明 凝灰岩 灰白色 4面磨耗
202	陶器	常滑 転用研磨具	直径 3.2	厚さ 0.7	—	胎土:灰色 黒・白色粒 常滑片口鉢 I 類転用 外底部やや磨耗
出土遺物(6) (図15)						
203	土器	手づくね かわらけ・小	(9.0)	—	1.7	1/3 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:灰橙色
204	石製品	砥石	長径 3.5	短径 3.4	厚さ 0.9	色調:灰緑色～灰色 3面磨耗
205	土器	手づくね かわらけ・小	(8.8)	—	1.8	1/3 胎土:白色針状物質、雲母、白・黒・赤色粒 色調:橙色 内外部に黒ずみ痕
206	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.2)	(8.0)	1.8	1/4 胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒 色調:にぶい黄橙色
207	土器	ロクロ かわらけ・小	9.2	7.8	1.9	完形 94g 胎土:白色針状物質、雲母、白・黒・赤色粒 色調:灰黄色
208	土器	かわらけ転用 円盤	直径 3.5	厚さ 1.0	—	胎土:白色針状物質、雲母、白・黒・赤色粒 色調:橙色
209	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	5.8	1.8	完形 56g 胎土:白色針状物質、雲母、黒・白・赤色粒 色調:にぶい黄橙色 内底部に液体?痕、内外、黒く変色

遺物 番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
210	土器	手づくね かわらけ・大	(12.7)	—	2.2	1/4 胎土:白色針状物質、雲母、白・黒色粒 色調:灰黄色
211	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.0)	(7.5)	2.2	1/3 胎土:白色針状物質、雲母、黒・白・赤色粒 色調:にぶい黄橙色 内部縁・外部に黒ずみ痕
212	土器	ロクロ かわらけ・大	12.5	8.7	3.0	1/2 胎土:白色針状物質、黒色粒 色調:淡橙色/橙色 外底面に板状圧痕
213	陶器	渥美 甕	—	—	[3.8]	底小片 胎土:白色粒 色調:灰黄色 内面に自然釉
214	土器	手づくね かわらけ・大	(14.0)	—	3.4	1/2 胎土:雲母、黒色粒 色調:灰色～灰黄色
215	土器	手づくね かわらけ・小	9.3	—	1.6	略完形 [67]g 胎土:雲母、白色針状物質、黒色粒 色調:にぶい黄褐色
216	土器	手づくね かわらけ・小	(9.3)	—	2.0	1/3 胎土:白色針状物質、黒色粒 色調:橙色
217	土器	ロクロ かわらけ・大	(14.8)	8.6	3.9	1/3 胎土:角閃石、石英粒、白色針状物質 色調:淡橙褐色/黒褐色 外底面に板状圧痕
218	木製品	漆器 椀	(15.4)	(8.8)	[4.8]	1/4 内外面黒色系漆塗り 体部外面に4条一組の横位沈線
219	木製品	漆器 椀	(15.6)	7.8	[2.8]	1/3 土圧により体部が押し広げられる 体部外面～内全面黒色系漆塗り
220	木製品	用途不明	長さ 23.8	幅 1.8	厚さ 1.3	完形 柾目材
221	木製品	箸	長さ [15.2]	幅 [0.7]	厚さ 0.5	一端欠損
222	木製品	草履芯	長さ [13.9]	幅 [2.8]	厚さ 0.2	一部残存 柾目材 直径2mm程度の小孔5ヶ所
223	木製品	草履芯	長さ [15.0]	幅 [2.8]	厚さ 0.2	一部残存 柾目材
224	土器	手づくね かわらけ・小	(8.6)	—	2.0	1/4 胎土:白色針状物質、黒色粒 色調:橙色
225	土器	手づくね かわらけ・大	(13.8)	—	3.3	1/3 胎土:白色針状物質、雲母、黒・白色粒 色調:にぶい黄橙色

表2 出土遺物カウント表

① 各遺構面までの掘り下げ時

凡例 点数=破片数
重量単位 = g

帰属 遺構面	出土状況	かわらけ								白かわらけ					
		ロクロ				手づくね				ロクロ	手づくね		小片		
		大	小	内折れ		大	小	内折れ	大						
点数	重量														
表土	表採	3	30	5	45			6	85						
表土	掘削時	45	540	7	35			1	15						
0-1	掘削時	344	3610	20	330			1	35						
1-2	掘削時	87	810	27	210			5	65	1	5				
2-3	掘削時	225	2795	56	535	1	5	52	800	23	255		1	5	
3-4	掘削時	76	880	29	215	1	10	271	3035	69	735	5	1	2	10
4下	掘削時	1	15	1	5			22	335	6	40				

帰属 遺構面	出土状況	土器			白磁		青白磁	青磁(同安系)		
		南伊勢系鍋	火鉢	不明	口禿碗・皿	碗皿	梅瓶	櫛描文碗		
		点数	重量							
表土	表採				1	15				
表土	掘削時									
0-1	掘削時		2	50	3	90	1	5	3	20
1-2	掘削時	2	15	1	50		2	15		
2-3	掘削時	1	10				1	5	3	20
3-4	掘削時						1	10		
4下	掘削時								1	15

帰属 遺構面	出土状況	青磁(龍泉系)					舶載陶器					
		劃花文碗	蓮弁文碗	折縁皿(坏)	碗・皿	壺類	褐釉壺	緑釉盤	澱青釉植木鉢			
		点数	重量									
表土	表採											
表土	掘削時						1	25				
0-1	掘削時	1	15	7	80		5	90	2	50	1	50
1-2	掘削時			4	100	1	10	1	5			
2-3	掘削時			3	60			2	10			
3-4	掘削時			1	5			2	10	1	25	
4下	掘削時			1	5					1	10	

帰属 遺構面	出土状況	瀬戸		尾張・常滑															
		香炉	洗?	甕	壺	山茶碗	片口碗	片口鉢		転用片									
		点数	重量					I類	II類										
表土	表採			11	725					1	15								
表土	掘削時			23	1145					2	80	2	105	1	80				
0-1	掘削時	1	10			225	1150	5	375	2	35	1	50	12	455	8	710	3	170
1-2	掘削時					32	1865	1	25			6	60	6	350	1	95		
2-3	掘削時					47	1990	5	145	1	5			4	365	5	300		
3-4	掘削時							1	5					4	80	2	135	1	15
4下	掘削時					8	215												

帰属 遺構面	出土状況	渥美・湖西		東遠	備前	瓦器	瓦質土器		瓦	土製品					
		甕	山茶碗	小皿	播鉢	碗	火鉢	香炉?	不明	轆羽口					
		点数	重量												
表土	表採	1	80												
表土	掘削時							1	55						
0-1	掘削時	1	45			1	70	5	295	1	50	2	165	2	250
1-2	掘削時	2	85					1	15						
2-3	掘削時	3	100	1	15			1	105						
3-4	掘削時	9	740			2	70	1	170						
4下	掘削時														

帰属 遺構面	出土状況	銅製品	鉄製品・鉄滓				石製品									
		銭	皿	釘	不明	鉄滓	滑石鍋	紡錘車	基石	砥石						
		点数	重量													
表土	表採	3	10													
表土	掘削時	1	5	1	65				1	40			2	55		
0-1	掘削時	9	35			24	260	4	75	5	735		1	5	7	460
1-2	掘削時	3	10							5	20				3	165
2-3	掘削時	2	10			11	45									
3-4	掘削時					2	30			1	10				1	150
4下	掘削時					1	10									

帰属 遺構面	出土状況	木製品			肥前系磁器				瀬戸・美濃系磁器	
		箸	棒状	栓?	染付碗皿		壺類		染付碗	
		点数			点数	重量				
表土	表採								1	10
表土	掘削時				2	25				
0-1	掘削時	2	3	1	14	310	2	25	15	195
1-2	掘削時									
2-3	掘削時									
3-4	掘削時									
4下	掘削時									

帰属 遺構面	出土状況	瀬戸・美濃系陶器											堺・明石系陶器			
		播鉢		柄付片口鉢		皿		灯明 油受皿		香炉?		瓶類		播鉢		
		点数	重量													
表土	表採															
表土	掘削時	2	65	1	255	1	50	1	5	1	5	1	5	1	245	
0-1	掘削時	3	115					1	45					3	280	
1-2	掘削時															
2-3	掘削時															
3-4	掘削時															
4下	掘削時															

帰属 遺構面	出土状況	土師器				ロクロ土師器		須恵器		灰釉陶器		獣骨		貝						
		坏		壺		甕		高台付坏		坏		甕		碗		不明	魚類	アカシ	ササエ	ハマグリ
		点数	重量																	
表土	表採																			
表土	掘削時																			
0-1	掘削時								1	5			1	5	1		2	1	1	
1-2	掘削時																			
2-3	掘削時										1	15	1	5	3	1				
3-4	掘削時			1	10	3	45	2	60						2					
4下	掘削時	1	5			7	85													

② 攪乱・1面遺構

帰属 遺構面	遺構	かわらけ											白かわらけ				
		ロクロ						手づくね				小片		手づくね 大			
		特大	大	小	内折れ	大	小										
0	攪乱		1	10	4	10											
	攪乱1		6	70	1	5		3	30								
	攪乱2		115	1745	58	485		22	300	7	190			1	5		
1	1		19	250	4	35											
	3	1	150	345	4755	86	900	1	5	4	60	2	85	29	75	2	10
	4			11	170	6	25		2	15							
	201			2	20							1	5				
	202			2	25												
	203			43	520	17	130		7	75	1	15					
	205																
	207			8	130	8	145										
	208			3	50				3	25					1	5	
	209																
	210-211			5	100	1	10										
213			1	20													
222			37	535	8	70		8	100	2	55						

帰属 遺構面	遺構	土器				白磁			青白磁		青磁(同安系)		
		鍔釜	南伊勢系鍋	不明		口禿碗 ・皿	碗皿	瓶類	梅瓶	合子身	櫛描文碗		
		点数	重量										
0	攪乱												
	攪乱1	1	10										
	攪乱2			2	15	1	5	2	5	2	295	1	10
1	1		1	10									
	3			1	15	1	5			1	105		
	4												
	201												
	202												
	203					1	10			1	5		
	205												
	207						1	10					
	208												
	209												
	210-211												
213													
222			2	15						1	5		

帰属 遺構面	遺構	青磁(龍泉系)						高麗青磁		瀬戸											
		劃花文碗		蓮弁文碗		折縁皿 (坏)	碗・皿		壺類		瓶類		卸皿		入子		洗?		瓶類		
		点数	重量																		
0	攪乱																				
	攪乱1														1	5					
	攪乱2	1	5	6	50			3	50			2	85	1	10			1	25	2	75
1	1																				
	3			4	35	1	25	1	15					1	25					1	25
	4																				
	201																				
	202																				
	203			1	5			2	10												
	205																				
	207																				
	208	1	25																		
	209							2	5												
	210・211			1	5					1	5										
	213																				
222					1	35															

帰属 遺構面	遺構	尾張・常滑								渥美・湖西		備前						
		甕		壺	山茶碗	片口碗	片口鉢		転用片	甕		播鉢						
		点数	重量				I類	II類										
0	攪乱	1	40										1	15				
	攪乱1	5	265										1	200				
	攪乱2	158	8895						13	745	8	490	1	30	4	205	4	200
1	1	1	75															
	3	70	4745		1	10	1	20	4	355								
	4	3	55															
	201	1	50															
	202																	
	203	21	835						2	95	3	100						
	205	2	75															
	207			1	25													
	208								1	25								
	209	3	155						1	20								
	210・211	5	250										2	215				
	213																	
222	42	3150						2	160	5	1160							

帰属 遺構面	遺構	瓦質土器		瓦		土製品		銅製品		鉄製品・鉄滓							
		火鉢		蓋	不明	輪羽口	円盤	銭		皿		釘		鉄滓			
		点数	重量														
0	攪乱																
	攪乱1										24	350					
	攪乱2	4	345	1	50	3	595	1	115			2	10	4	35	5	1770
1	1									1	5						
	3					2	215					4	25	1	15		
	4																
	201																
	202													1	65		
	203	2	390							1	5						
	205																
	207																
	208											1	10				
	209																
	210・211							1	25								
	213																
222																	

帰属 遺構面	遺構	石製品							肥前系磁器			瀬戸・美濃系磁器							
		滑石鍋		紡錘車		硯		砥石		石臼		不明		染付碗皿		壺類		染付碗	
		点数	重量																
0	攪乱																		
	攪乱1							1	40					4	20			9	200
	攪乱2					1	185	2	95			2	265	16	250	3	45	21	205
1	1					1	50												
	3	4	175							1	2000					1	5	1	5
	4							1	135										
	201																		
	202																		
	203							2	15							2	120		
	205																		
	207																		
	208																		
	209																		
	210・211																		
213																			
222																			

帰属 遺構面	遺構	瀬戸・美濃系陶器						堺・明石系陶器			土師器		獣骨	具				種子	備考
		播鉢		皿		瓶類		播鉢		転用片	坏		不明	アカニシ	パイ	ツメタ	ダンベ キサゴ	桃核	
		点数	重量										点数						
0	攪乱																		
	攪乱1			1	50														
	攪乱2	7	455	3	130	1	10	7	670	1	50		1	1					
1	1												4		1	1	1	1	
	3																		
	4																		
	201																		
	202																		
	203	1	25																
	205																		
	207																		
	208																		
	209											1	10						
	210・211																		
213																			
222																			

常滑甕は5~6型式

③ 2面遺構

帰属 遺構面	遺構	層位	かわらけ						白かわらけ 手づくね 大	白磁		青白磁		青磁(龍泉系)	
					手づくね		小片	碗皿		梅瓶	碗・皿				
			大	小	大	小									
	面上		点数	重量									1	10	
2	5		3	30	3	25									
	8				1	10									
	9		2	20											
	11														
	13		1	5											
	15		1	15											
	17														
	18									1	5				
	19		1	20	1	35									
	20		1	25											
	21		7	95				7	20						
	22		2	20			3	45							
	23														
	24		1	10	1	5	3	25							
	214		10	505	2	5									
	215		40	345	11	50				1	5				
215-P1		12	125	4	80										
215-P2		5	45	4	20		1	5							
215-P3		12	165	6	45										
218															
219		1	20												
2-3	道路	被覆土										1	5		
2-3	道路	掘削時													

帰属 遺構面	遺構	層位	瀬戸		尾張・常滑			渥美・湖西		瓦質土器		瓦	
			瓶類		甕	壺	片口鉢 I類		甕	火鉢		平瓦 不明	
			点数	重量									
	面上				1	25							
2	5				1	50							
	8									1	35		
	9												
	11												
	13				1	25							
	15												
	17							1	15				
	18												
	19							1	25				
	20					1	120						
	21												
	22												
	23												
	24												
	214								1	40			
	215		1	5	5	655			1	45			
215-P1													
215-P2				1	305								
215-P3				3	75								
218				1	35								
219													
2-3	道路	被覆土					1	25		1	15		
2-3	道路	掘削時			1	15							

帰属 遺構面	遺構	層位	銅製品		鉄製品		石製品		肥前系磁器		獣骨	備考
			銭		釘		砥石		染付碗皿		不明	
			点数	重量							点数	
2	面上				1	10						
	5				1	5						
	8		1	5								
	9											
	11		1	5								
	13											
	15											
	17											
	18											
	19											
	20											
	21					2	10					
	22											
	23		1	5								
	24											
	214								1	5		
	215		1	5							1	
215-P1				1	5							
215-P2											常滑甕は5~6型式	
215-P3												
218												
219												
2-3	道路	被覆土 掘削時					1	15				

④ 3面遺構

帰属 遺構面	遺構	かわらけ														白かわらけ					
		手づくね						手づくね				不明		小片		円盤		手づくね 小			
		大		小		内折れ		大		小		内折れ		不明		小片		円盤		手づくね 小	
		点数	重量																		
3	面上	35	495	13	210	15	155	4	645	1	90			1	10					1	10
	25	65	1715	11	400			27	475	16	260					20	35	1	5		
	27							1	20												
	28							2	10												
	35	1	10																		
	38																				
	42	2	20	1	5			5	45	1	5	1	10								
	44									1	5										
	45	1	5					2	20	1	10										
	46	1	5	3	15			1	5												
	47	2	35	1	5																
	214b	30	950	18	255			34	463	5	40							1	10		
	220	8	150	7	15			16	210	1	20										
	221			4	15			9	75												
	223									1	10										
	224																				
	231	1	5																		
	233			1	10																
	237							1	5												
	241																				
243	16	95	1	5			13	110													
244	1	10	1	5			1	20													
245																					
246	1	80					1	20	1	15											
247																					
248							1	5													
249							3	10													
250									3	10											

帰属 遺構面	遺構	白磁		青白磁		青磁(龍泉系)		瀬戸		尾張・常滑		渥美・湖西		東遠					
		口禿碗・皿		合子蓋		劃花文碗		蓮弁文碗		洗?	碗	甗		片口鉢 I類		甗		山茶碗	
		点数	重量																
3	面上						2	10			14	590	1	60					
	25										6	280			1	220			
	27																		
	28													1	60				
	35										1	35							
	38										2	80							
	42										4	290							
	44								1	51									
	45										1	45							
	46																		
	47										1	25							
	214b			1	5		2	55			19	935			1	90			
	220					1	5	1	10		16	540					1	20	
	221						1	10	1	5									
	223																		
	224										1	50							
	231	1	5																
	233																		
	237										1	25							
	241										1	45							
243										8	220					1	5		
244										1	40								
245										6	255								
246																			
247																			
248																			
249																			
250																			

帰属 遺構面	遺構	瓦器		瓦	鉄製品・鉄滓		石製品	瀬戸・美濃系陶器	獣骨
		碗		平瓦 不明	釘	鉄滓	滑石鍋	插鉢	不明
		点数	重量						
3	面上						1	125	
	25								
	27								
	28								
	35								
	38								
	42								
	44				1	15			
	45				2	10			
	46								
	47							1	25
	214b			1	95				2
	220								
	221								
	223								
	224								
	231								
	233								
	237								
	241								
243	1	5							
244									
245									
246									
247					1	75			
248									
249									
250									

④ 3b 面・4 面遺構

帰属 遺構面	遺構	かわらけ						白かわらけ			土器		青磁(龍泉系)			
		ロクロ			手づくね			ロクロ		手づくね	南伊勢系鍋		劃花文碗		蓮弁文碗	
		大	小		大	小		内折れ	大							
	48		3	10	5	35										
	49		1	55			1	25								
	50		3	105			2	10								
	52				3	35										
	52b						1	5								
	54						1	10	1	10					1	5
	55		1	5	1	10										
	56												1	25		
	58		1	55						1	10					
	59				1	15										
	60		4	25	7	130										
	61				1	10										
	62	2	40	1	15											
	63		1	10												
	65						1	20								
	67				4	25	2	5								
	68	1	20				1	5					1	20		
	69				1	10										
	70				3	25										
	72				2	20										
3b	76						3	15								
	80	1	5		3	25										
	81				1	15										
	82				2	45										
	83			1	10	10	45	6	20							
	85	2	20	1	35	3	20									
	86			1	5	7	65	1	30							
	87	1	5		2	20	1	5			1	5				
	253															
	254															
	255															
	258															
	260	1	10	1	5	2	100									
	270	1	5	1	5											
	272				1	10	1	5								
	273				2	10	3	10								
	279	3	15	1	10											
	296				1	10										
	301						2	65								
	259	1	138		3	70	4	25					1	10		
4	300						1	25								

帛属 遺構面	遺構	尾張・常滑		渥美・湖西		鉄製品		石製品		木製品・木材			漆器	土師器				
		甕		片口鉢 I類		甕		釘		砥石		草履 芯	箸	棒状	椀	坏	相模型甕	不明
		点数	重量									点数						
	48	2	285						1	25								
	49						1	5										
	50																	
	52																	
	52b			1	20													
	54	1	10	1	75	1	80											
	55	10	540															
	56																	
	58																	
	59	3	220															
	60																	
	61																	
	62						1	5										
	63																	
	65																	
	67	1	20															
	68	2	55															
	69																	
	70																	
	72																	
3b	76																	
	80																	
	81													1	5			
	82																	
	83																	
	85																	
	86	3	170															
	87																	
	253	1	85															
	254	1	55															
	255	1	125															
	258					1	150											
	260															1	5	
	270																	
	272																	
	273	1	100	1	40													
	279																	
	296																	
	301																	
	259										2	1	1	2			1 5	
4	300																	

付編 米町遺跡の寄生虫卵分析・花粉分析

森 将志 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

神奈川県鎌倉市大町二丁目に所在する米町遺跡において検出された遺構 259 の性格を調べるために、遺構内堆積物が採取された。以下では、試料について行った寄生虫卵分析と花粉分析の結果を示し、遺構 259 の性格について検討した。

2. 試料と分析方法

分析試料は、遺構 259 の 2 層から採取された黒色 (N1.5/) 細粒砂と、最下層に相当する 3 層から採取された黒色 (7.5Y2/1) 砂混じり粘土の 2 点である。これらの試料について、以下の手順にしたがって寄生虫卵分析および花粉分析を試みた。

2-1. 寄生虫卵分析

一定量の体積 (2ml) の試料を採取し、水を加えて攪拌した後、椀かけ処理を施す。次に、10%の水酸化カリウム溶液を加え 10 分間湯煎する。水洗後、46%のフッ化水素酸溶液を加え 1 時間放置する。水洗後、比重分離 (比重 2.1 に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離) を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理 (無水酢酸 9:1 濃硫酸の割合の混酸を加え 10 分間湯煎) を行う。水洗後、この残渣に適容量のグリセリンを加えて体積を測定し、保存用とした。この残渣からマイクロピペットを用いてプレパラートを作製し、プレパラート全面に渡り検鏡した。試料 1ml 中の寄生虫卵含有数は、次式による方法で求めた。

$$X = BD/AC$$

X: 試料 1ml 中の寄生虫卵含有数、A: 分析に用いた試料の体積、B: 濃縮試料 + グリセリンの体積、C: 濃縮試料 + グリセリンのうち、封入に用いた体積、D: プレパラート中の寄生虫卵数

2-2. 花粉分析

試料 (湿重約 3 ~ 4g) を遠沈管にとり、10%の水酸化カリウム溶液を加え 10 分間湯煎する。水洗後、46%のフッ化水素酸溶液を加え 1 時間放置する。水洗後、比重分離 (比重 2.1 に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離) を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理 (無水酢酸 9:1 濃硫酸の割合の混酸を加え 20 分間湯煎) を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。この残渣より適宜プレパラートを作製した。2 層の試料についてはプレパラート全面に渡り検鏡した。3 層の試料については樹木花粉が 200 個を超えるまで検鏡し、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。なお、図版に示した分類群ごとの単体標本 (PLC.586 ~ 591) は、パレオ・ラボに保管されている。

3. 分析結果

検鏡の結果、2 層では寄生虫卵および花粉化石の産出は確認できなかったが、3 層では寄生虫卵と花粉化石の産出が確認できた。3 層から産出した寄生虫卵は鞭虫卵と横川吸虫卵の 2 種類で、鞭虫卵は試料 1ml 当たり 24 個、横川吸虫卵は試料 1ml 当たり 8 個である。計量の結果と寄生虫卵数を表 1 に示す。また、産出した花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉 11、草本花粉 11、形態分類を含むシダ植物胞子 1 の総計 23 である。これらの花粉・胞子の一覧表を表 2 に、分布図を図 1 に示した。分布図において、

表 1 寄生虫卵分析に用いた試料の計量値と寄生虫卵数

	遺構259	
	2層	3層
分析に用いた試料(ml)	2	2
残渣+グリセリン(ml)	0.7	0.8
封入に用いた量(ml)	0.05	0.05
鞭虫卵 (試料1ml当たりの個数)	-	3 (24)
横川吸虫卵 (試料1ml当たりの個数)	-	1 (8)
合計 (試料1ml当たりの個数)	-	4 (32)

表 2 産出花粉化石一覧

学名	和名	遺構259	
		2層	3層
樹木			
<i>Sciadopitys</i>	コウヤマキ属	-	1
<i>Cryptomeria</i>	スギ属	-	114
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	-	2
<i>Pterocarya-Juglans</i>	サワグルミ属-クルミ属	-	1
<i>Carpinus-Ostrya</i>	クマシデ属-アサダ属	-	1
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	-	1
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	-	46
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	-	4
<i>Castanea</i>	クリ属	-	3
<i>Castanopsis-Pasania</i>	シイノキ属-マテバシイ属	-	25
<i>Ulmus-Zelkova</i>	ニレ属-ケヤキ属	-	2
草本			
Gramineae	イネ科	-	24
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i>	サナエタデ節-ウナギツカミ節	-	4
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	-	224
Brassicaceae	アブラナ科	-	1
Leguminosae	マメ科	-	1
Apiaceae	セリ科	-	1
<i>Solanum</i>	ナス属	-	365
<i>Sesamum</i>	ゴマ属	-	1
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	-	33
Tubuliflorae	キク亜科	-	20
Liguliflorae	タンポポ亜科	-	5
シダ植物			
Trilete type spore	三条溝孢子	-	1
Arboreal pollen	樹木花粉	-	200
Nonarboreal pollen	草本花粉	-	679
Spores	シダ植物孢子	-	1
Total Pollen&Spores	花粉・孢子総数	-	880
Unknown pollen	不明花粉	-	2

樹木花粉の産出率は樹木花粉総数を基数とし、草本花粉および孢子の産出率は産出花粉孢子総数を基数とした百分率で示してある。図および表においてハイフン(-)で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。また、マメ科の花粉には樹木起源と草本起源のものがあるが、各々に分けるのが困難なため、便宜的に草本花粉に一括して入れてある。

樹木花粉ではスギ属とコナラ属コナラ亜属、シイノキ属-マテバシイ属の産出が目立ち、それぞれ56%と23%、13%の産出率を示す。草本花粉ではアカザ科-ヒユ科とナス属の産出が多く、それぞれ26%と42%の産出率である。また、栽培植物のゴマ属がわずかに産出している。

4. 考察

今回の分析試料のうち、遺構259の最下層に相当する3層の試料から、1ml当たり32個の寄生虫卵が確認された。金原(1997)によると、寄生虫卵が試料1cm³中に1,000個以上あればその堆積物は糞便の可能性があると考えられている。寄生虫卵数から考えると、遺構259の堆積物に糞便が混じりこんでいた可能性は低いと思われる。よって、寄生虫卵分析の結果から遺構259が厠や肥溜めかどうかを判断するのは難しい。

次に、3層の花分析結果を見てみる。もし、遺構259が厠や肥溜めであれば、人間が食した物が排泄されているため、そこから産出する花粉化石群集には食物に含まれる花粉が多く含まれている可能性がある。3層の花分析結果では、草本花粉においてナス属とアカザ科-ヒユ科が特異的に高い産出率を示している。ナス属は野菜となる植物を含む分類群で、アカザ科-ヒユ科については、腹痛時の薬として用いられていた可能性が指摘されている(黒崎, 1997)

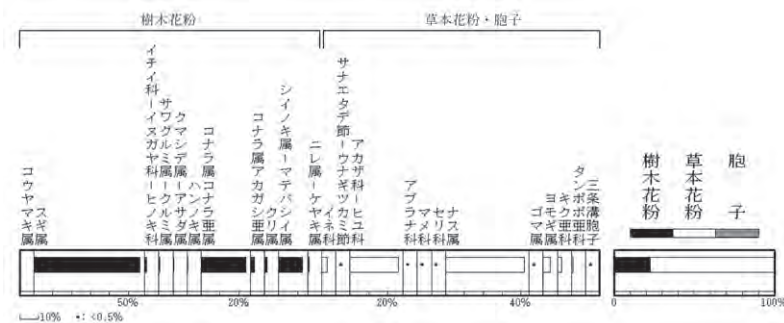


図 1 遺構 259-3 層における花粉分布図
樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・孢子は産出花粉孢子総数を基数として百分率で産出した。

など)。秋田城跡から検出された木桶底の花粉分析の例（金原正明・金原正子，1996）を見ると、寄生虫卵の産出が稀であるにもかかわらず、ナス科とアカザ科・ヒユ科、アブラナ科などが特異的に多産している。これらの分類群は当時の周辺植生を反映しているとは考えにくく、各遺跡で得られている糞便のデータと類似性があるため、遺構に残存していた糞便に由来すると考えられている。秋田城跡の木桶底の例と米町遺跡の遺構259の3層の分析結果を比べると、寄生虫卵がそれほど産出しておらず、ナス属とアカザ科・ヒユ科が特異的に産出する点が類似する。よって、今回の遺構259の3層から産出したナス属とアカザ科・ヒユ科は糞便由来の可能性が考えられる。

さらに、3層ではゴマ属花粉の産出も見られた。ゴマについては、石動山大宮坊跡の廁跡の種実分析において種子が多く確認され、17～18世紀の人々はゴマを食べていたと考えられている（金原ほか，1995）。今回は花粉分析しか行っていないため、試料にゴマの種子が含まれているかどうかは不明であるが、人がゴマを食す際に花粉を取り込み、それが排泄されたことも考えられる。

以上のように、259遺構の3層では寄生虫卵の検出量は極めて少ないものの、食用や薬用になる分類群の花粉化石が特異的な産出傾向を示し、従来知られているトイレ遺構から産出する花粉化石群集と類似した組成を示すため、糞便の存在が窺える。よって、遺構259はトイレ遺構や肥溜である可能性が高いように思われる。

引用文献

- 金原正明（1997）自然科学的研究からみたトイレ文化．大田区立郷土博物館編「トイレの考古学」:197-216, 東京美術.
 金原正明・金原正子（1996）秋田城跡便所遺構における微遺体分析．秋田市教育委員会編「秋田城跡平成7年度秋田城跡調査概報」:115-134, 秋田市教育委員会.
 金原正明・金原正子・中村亮仁（1995）大宮坊跡（廁跡）における自然科学的分析．鹿島町教育委員会編「史跡石動山環境整備事業報告Ⅱ」:51-70, 石川県鹿島町教育委員会.
 黒崎 直（1997）考古学の発掘現場におけるトイレ研究．大田区立郷土博物館編「トイレの考古学」:183-196, 東京美術.

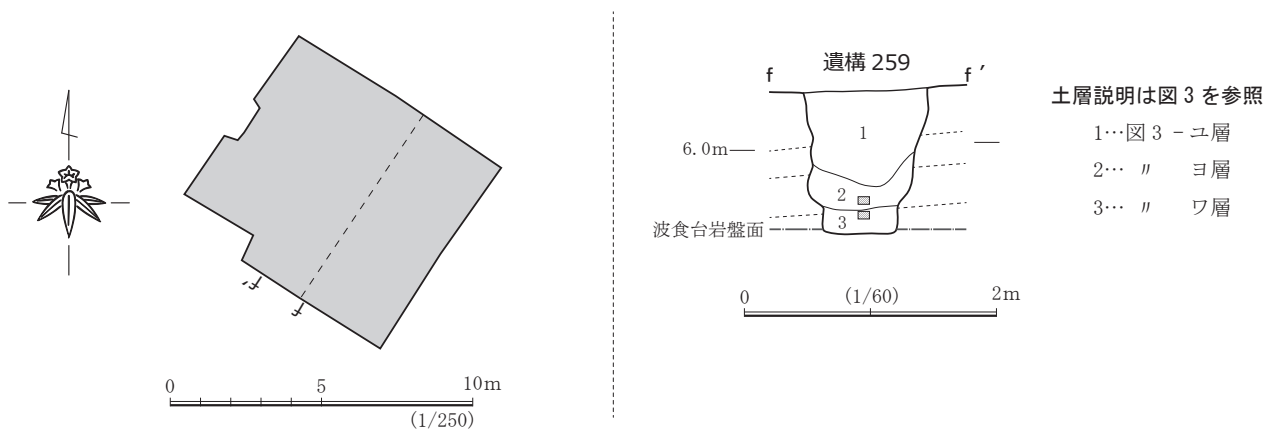
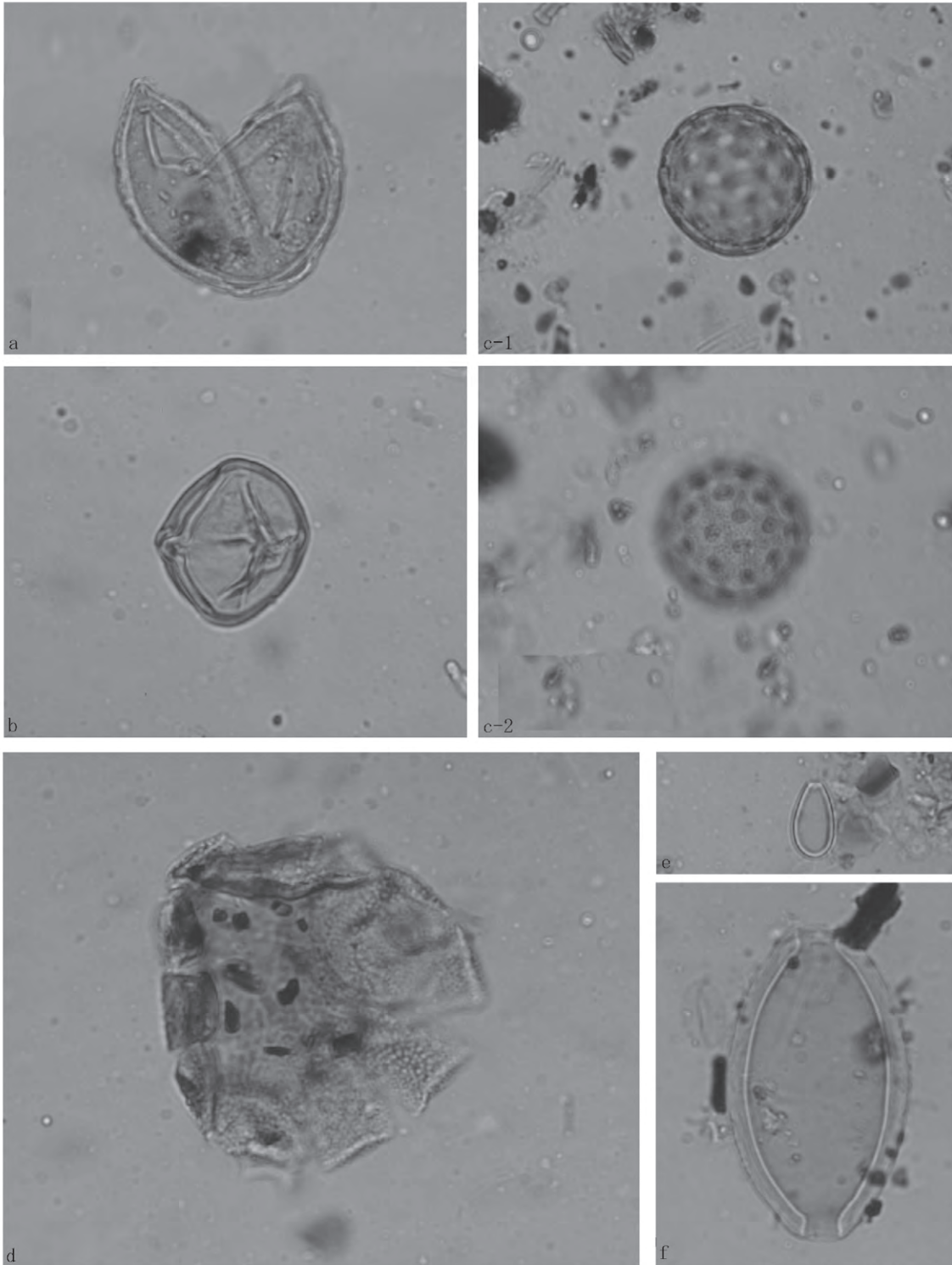


図2 試料の採取箇所



図版 遺構 259-3 層から産出した寄生虫卵および花粉化石

0.02mm

- a. スギ属 (PLC. 586)
- b. ナス属 (PLC. 587)
- c. アカザ科-ヒユ科 (PLC. 588)
- d. ゴマ属 (PLC. 589)
- e. 横川吸虫卵 (PLC. 590)
- f. 鞭虫卵 (PLC. 591)



1. 現地調査前（北東から）



4. I・II区 表土掘削状況（西から）



2. 調査地から祇園山を望む（II区調査時・南から）



5. I区 攪乱 1（南西から）



3. I区 表土掘削後（北東から）



6. I区 1面（北東から）

図版2



1. 井戸枠検出状況（南から）



2. 井戸枠 土台材上かわらけ出土状況（東から）



3. 井戸枠 南壁（北東から）



4. 井戸枠 北壁（南西から）

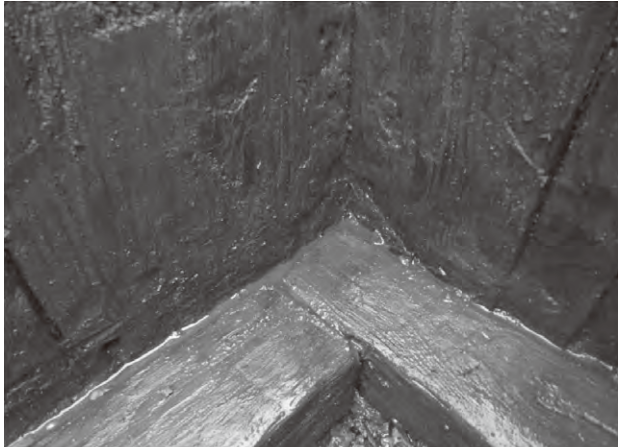


5. 井戸枠 南西隅の支柱（東から）



6. 井戸枠 北西隅の支柱（南から）

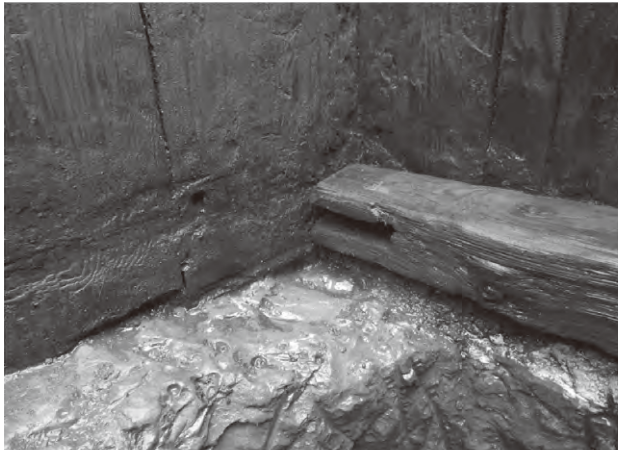
I区1面遺構3（井戸・4面調査時）①



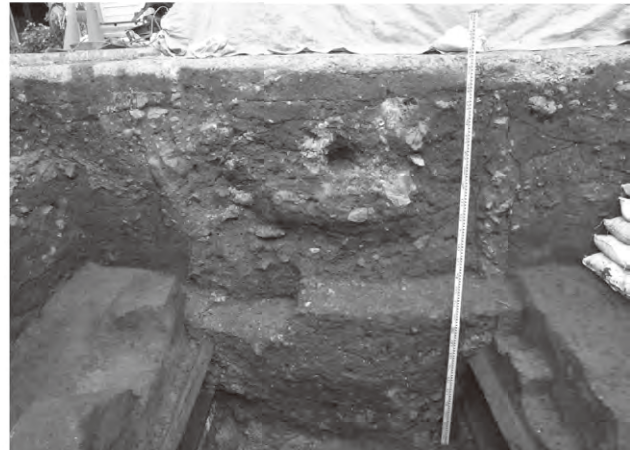
1. 井戸枠 北西隅の土台材 (南東から)



2. 井戸枠 北西隅の波食台岩盤と土台材 (南から)



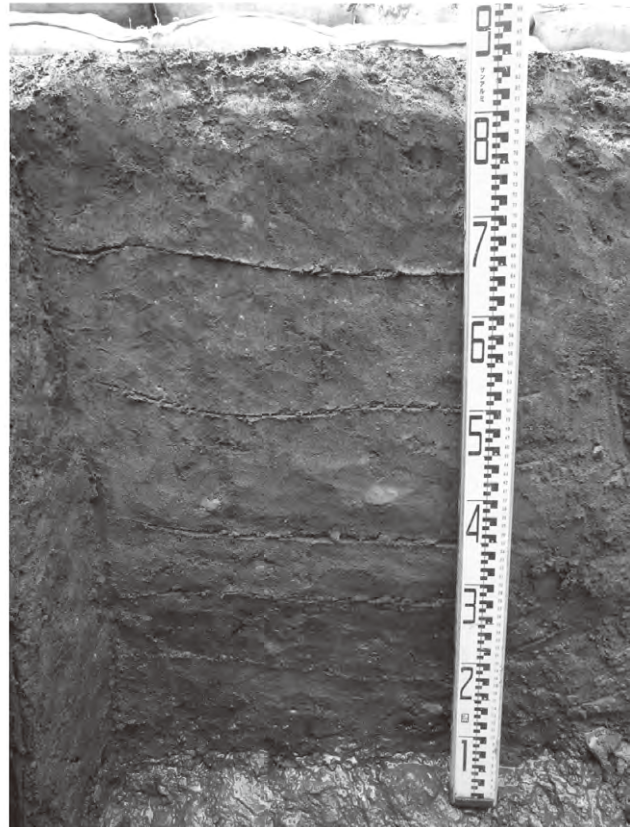
3. 井戸枠 北西隅の波食台岩盤と土台材 (南から)



4. 調査区東壁での土層断面 (北西から)



5. 井戸枠内と裏込め土 土層断面 (北西から)



6. 中世基盤層～波食台岩盤 土層断面 (北東から)

I区1面 遺構3 (井戸・4面調査時) ②

図版4



1. I区2面 (北東から)



3. I区3面 プラン確認後 (北東から)



2. I区2面 遺構47 (南東から)



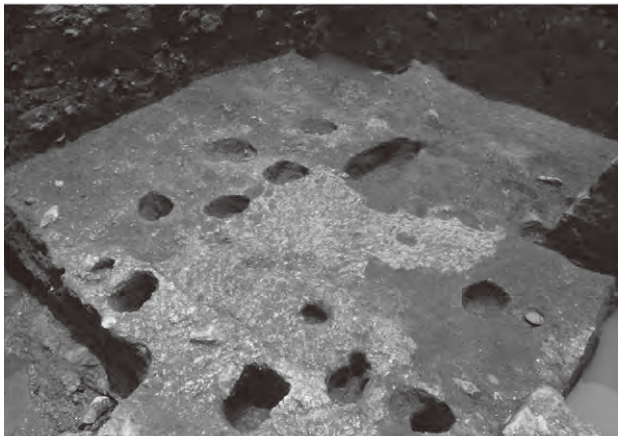
4. I区3面 プラン確認後 (東から)



5. I区3面上 遺物出土状況 (南東から)



1. I区3面 (北東から)



2. I区3面 土間状整地面 (北から)



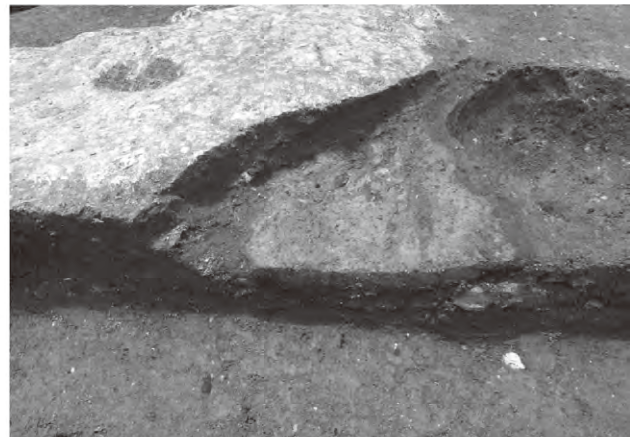
3. I区3面 土間状整地面の断面 (北東から)



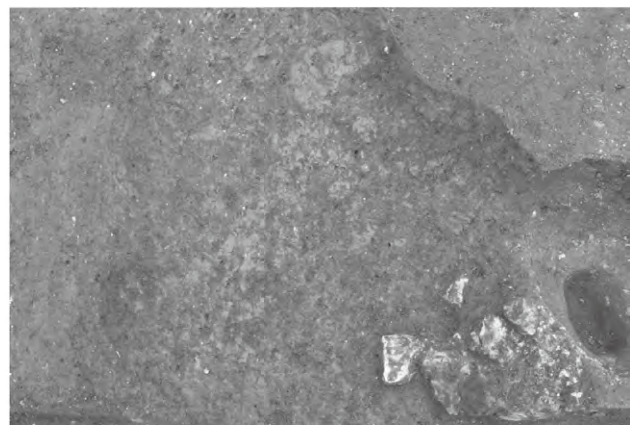
4. I区3面 土間状遺構・炉址の断面 (北東から)



5. I区3面 炉址の断面 (北東から)



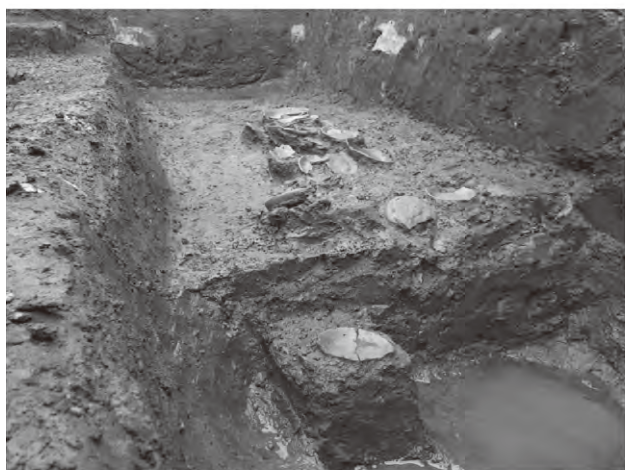
6. I区3面 炉址南半部 (北東から)



7. I区3面 炉址掘り方 (北東から)



1. I区3面遺構214b遺物出土状況(南東から)



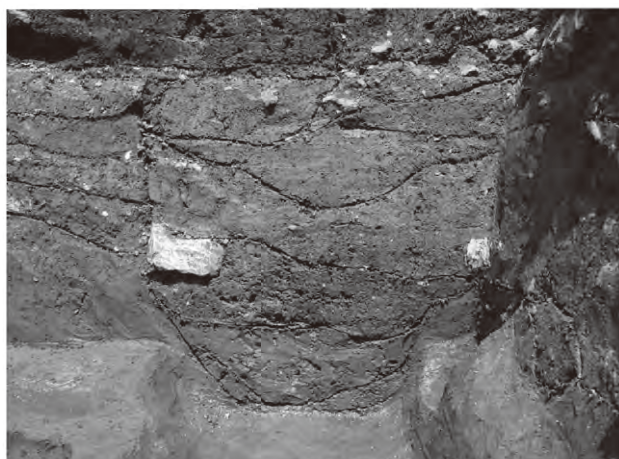
2. I区3面遺構214b遺物出土状況(南東から)



3. I区3面遺構214b(南東から)



4. I区3面遺構214b断面(北西から)



5. I区3面遺構214b断面(南東から)



1. I区大雨後 (2011年5月30日・西から)



2. I区3b面 (北東から)



4. I区西壁断面 (南東から)



3. I区4面 (北東から)



5. I区北壁断面 (南西から)

図版8



1. II区 攪乱 1 (北東から)



4. II区 2面 (北東から)



2. II区 1面 (北東から)



5. II区 2面 東西道路・遺構 214 (北西から)



3. II区 1面 東西道路 (北西から)



6. II区 2面 遺構 215 (南西から)



1. II区3面 (北東から)



3. II区3b面 (北東から)



2. II区3面 東西道路・遺構 214b (南西から)



4. II区3b面 東西道路・遺構 214b (南西から)

図版 10



1. II区 3b 面下 (北東から)



3. II区 4 面 遺構 259 (北東から)



2. II区 4 面 (北東から)



4. II区 4 面 遺構 259 断面 (北東から)



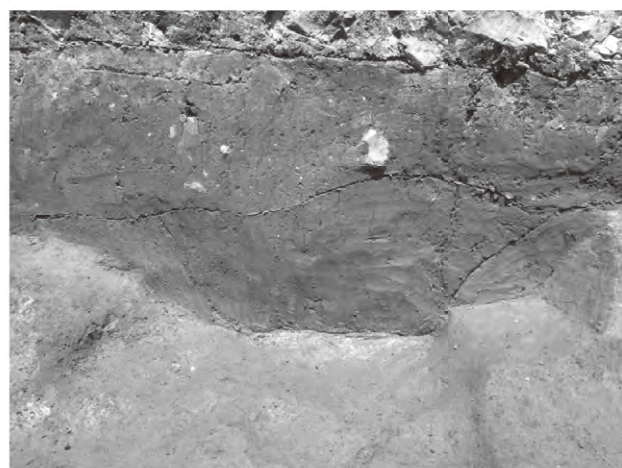
5. II区 4 面下 (北東から)



1. II区4面遺構300(4面下調査時・北東から)



3. II区4面遺構300断面(北東から)



4. II区4面遺構300断面(南西から)

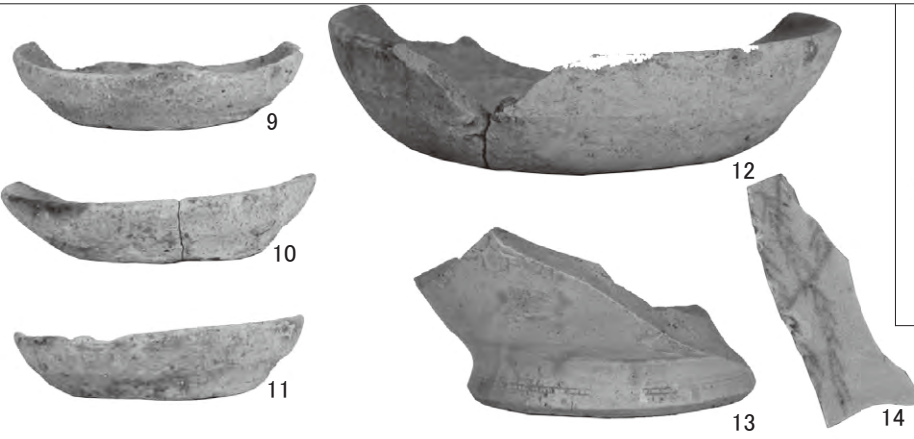
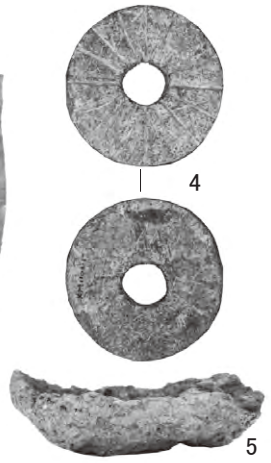
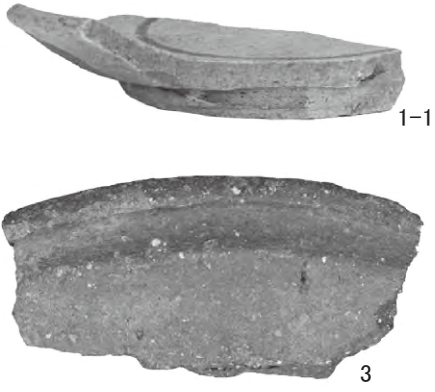


2. II区4面遺構300(4面下調査時・北東から)



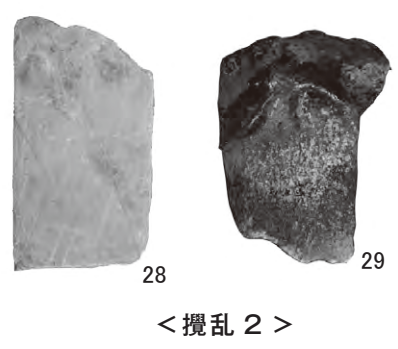
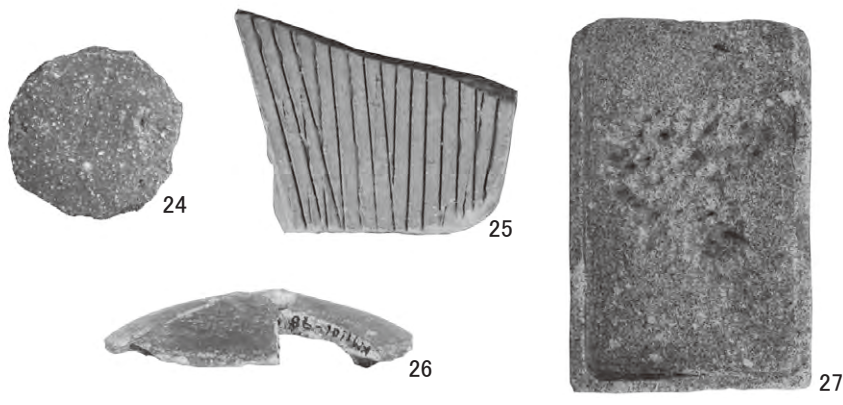
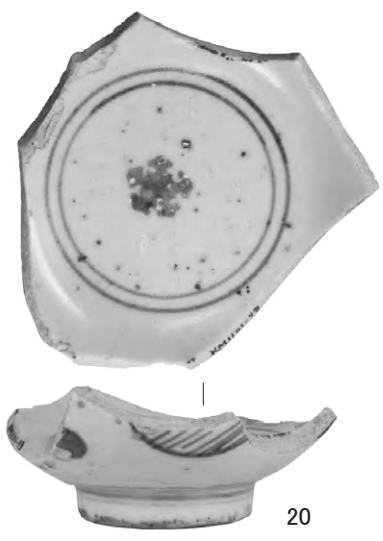
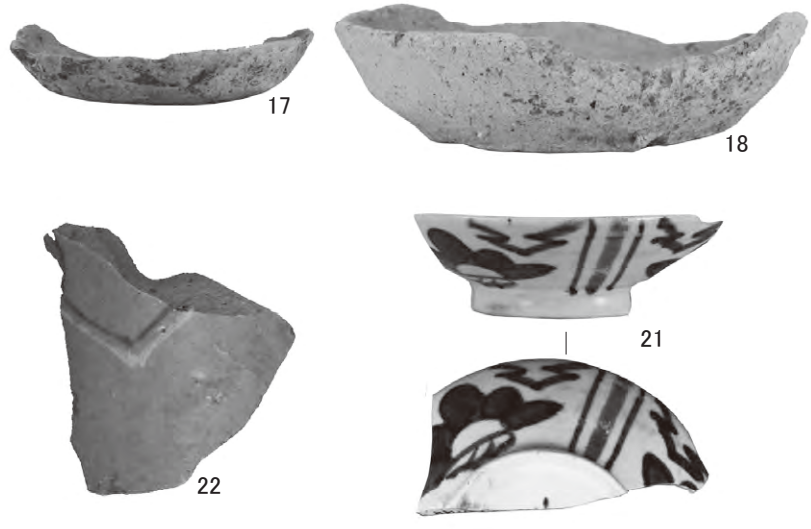
5. II区北壁断面(南西から)

表土・表採

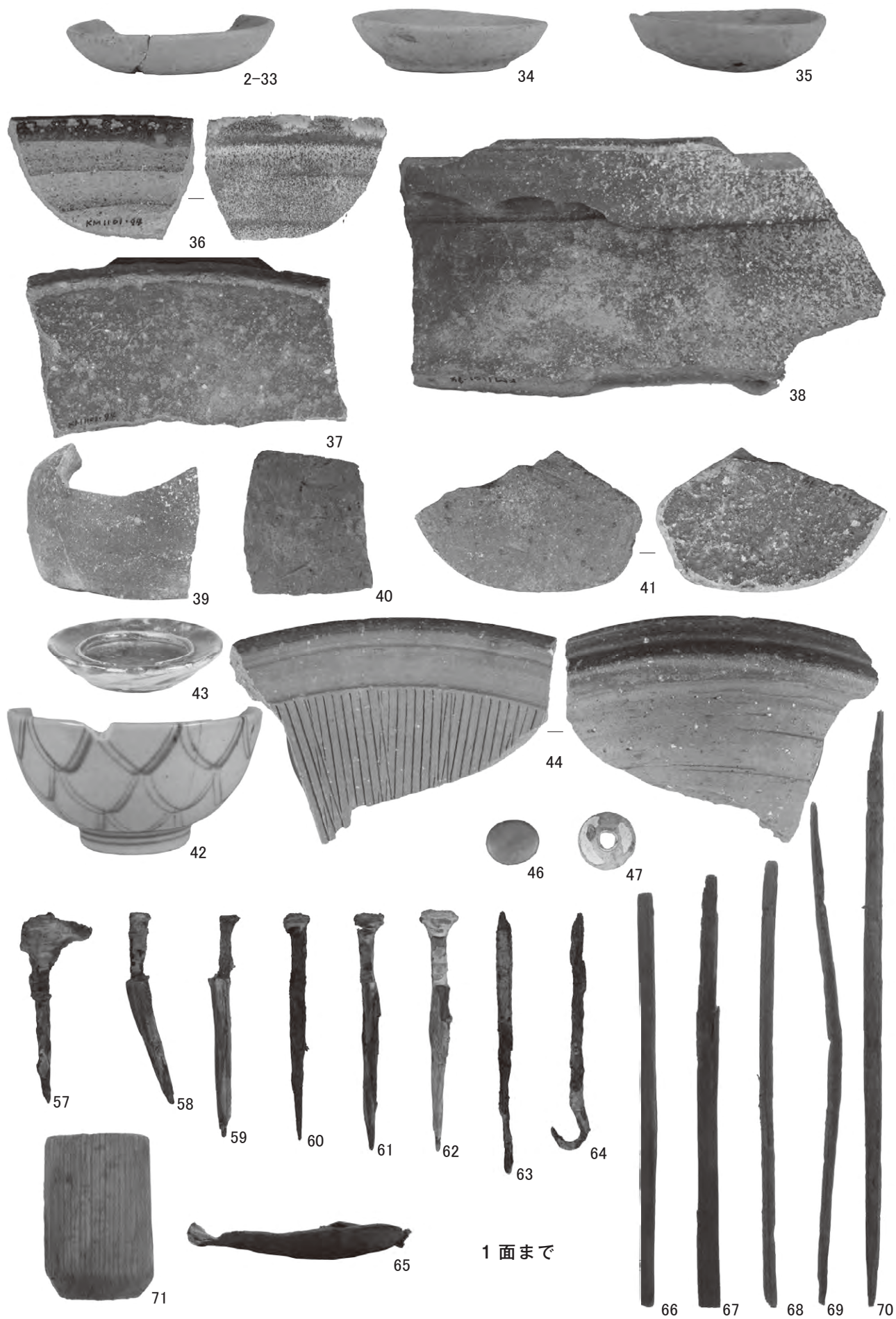


< 攪乱 1 >

攪乱



< 攪乱 2 >

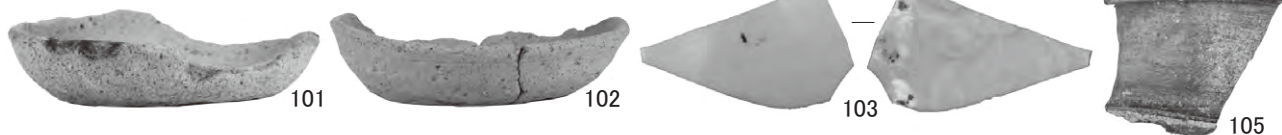


1 面まで

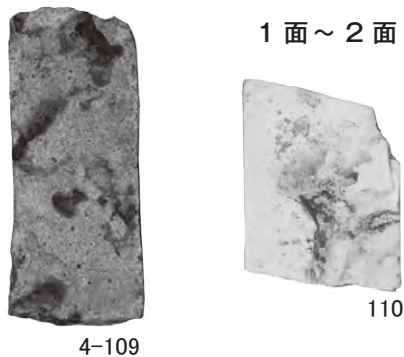
图版 14



1面 遺構 207



1面～2面

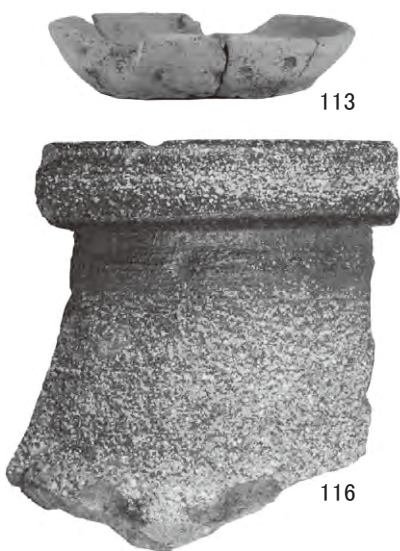


4-109

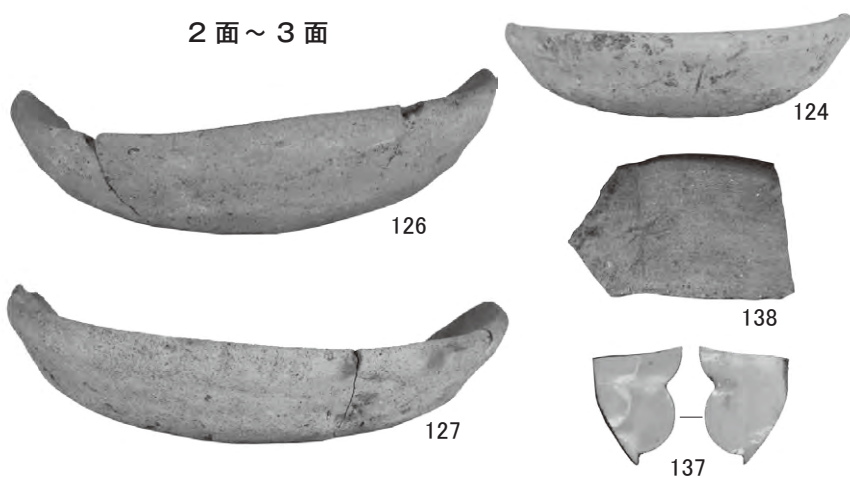
2面 遺構 214



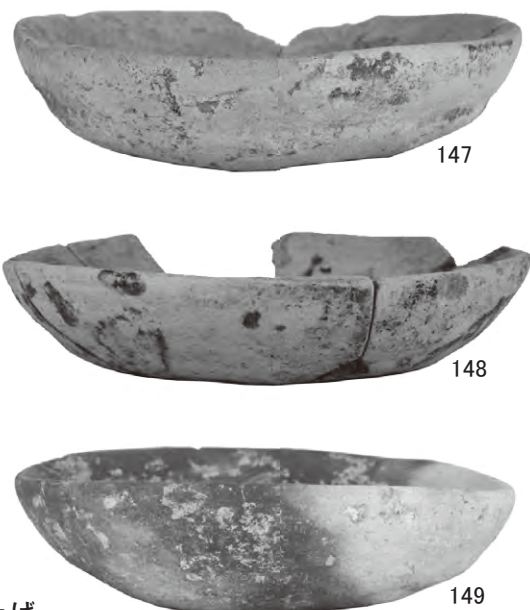
2面 遺構 215



2面～3面



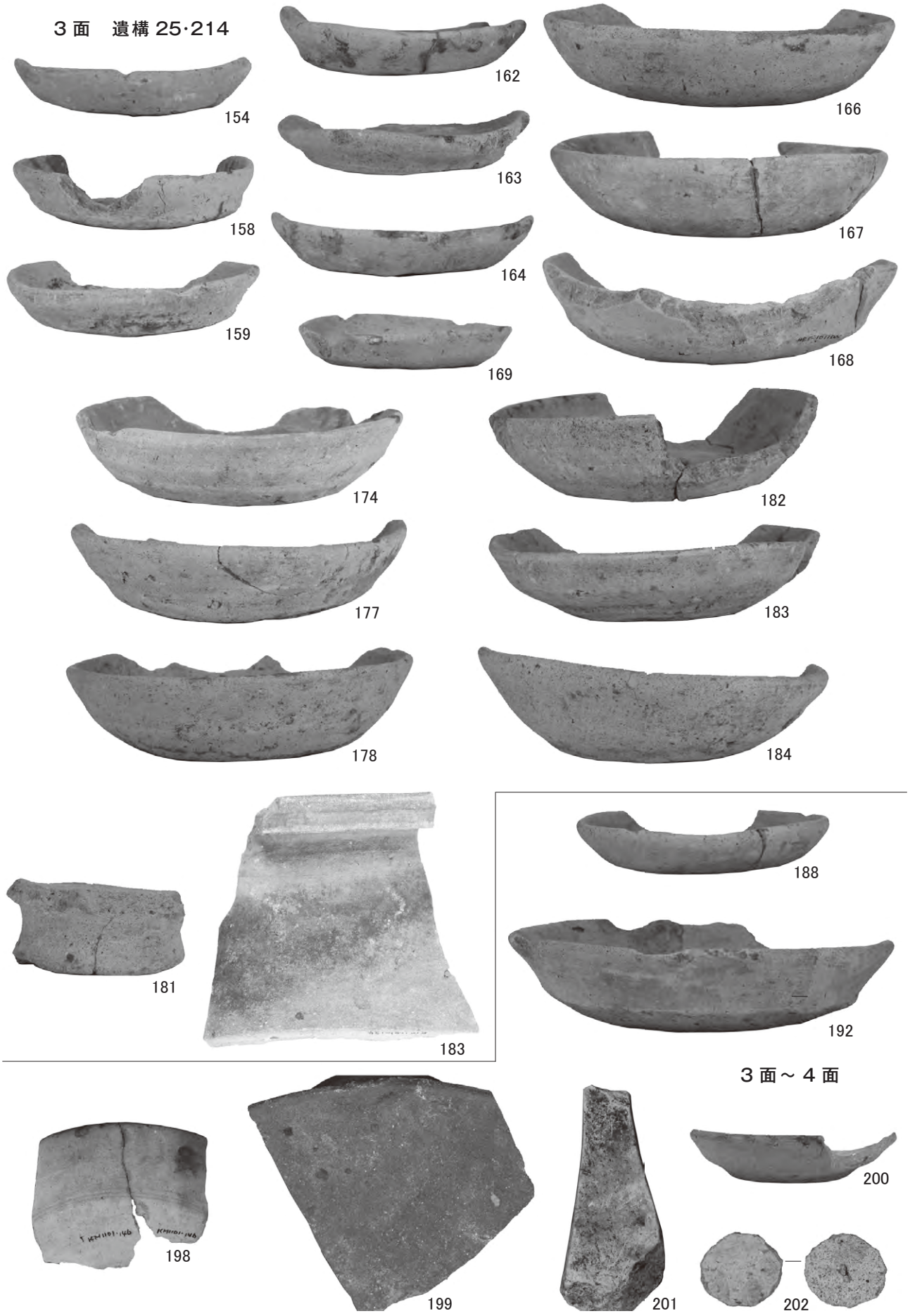
3面 遺構 220



3面上 個別取り上げ

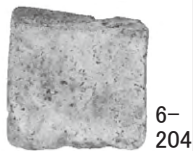
图版 16

3面 遺構 25・214



3面~4面

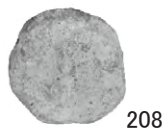
3b 面 遺構 86



3b 面 遺構 50



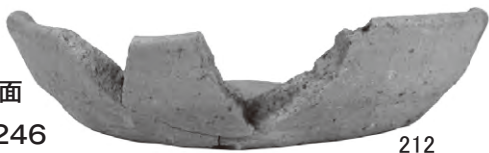
3b 面 遺構 54



3b 面 遺構 58



3b 面
遺構 246



3b 面
遺構 260



216



219



218



4 面 遺構 259



220



3b 面 遺構 301

215



4 面 遺構 300

224



221



222



223

